

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|-------|--------------|----------|------------|
| 20014 | 花湖城跡 | 城館 | 平安-中世 |
| 20015 | 清水洞窟貝塚 | 貝塚・墳墓 | 弥生・古墳・平安 |
| 20016 | 長須賀遺跡 | 貝塚・製塩 | 古墳後期～平安 |
| 20017 | 榊形開横穴墓群 | 横穴墓 | 古代 |
| 20018 | 水浜遺跡 | 集落・貝塚・製塩 | 弥生・平安 |
| 20019 | 神明遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 20020 | 影田貝塚 | 散布地 | 平安 |
| 20022 | 土浜A貝塚 | 貝塚・製塩 | 弥生・古代 |
| 20023 | 土浜B貝塚 | 貝塚・製塩 | 平安 |
| 20024 | 丑山遺跡 | 製塩 | 弥生・平安 |
| 20025 | 小友遺跡 | 製塩 | 弥生・古代 |
| 20026 | 丑谷辺遺跡 | 製鉄 | 古代? |
| 20027 | 沢上貝塚 | 貝塚 | 縄文晩期 |
| 20028 | 峯貝塚 | 貝塚 | 縄文晩期・古代 |
| 20030 | 小畑貝塚 | 散布地 | 縄文晩期・弥生・古代 |
| 20031 | 清水貝塚 | 貝塚・製塩 | 縄文晩期・弥生・古代 |
| 20032 | 左道遺跡 | 集落・貝塚 | 縄文前期・奈良・平安 |
| 20033 | 吉田神社遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 20034 | 藤ヶ沢貝塚 | 集落・貝塚 | 縄文前・中期 |
| 20035 | 東原遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 20036 | 諏訪神社前遺跡 | 貝塚・製塩 | 縄文晩期・古代 |
| 20037 | 笹山貝塚 | 貝塚・製塩 | 縄文晩期・弥生 |
| 20039 | 大木城跡 | 城館 | 中世 |
| 20040 | 水浜横穴墓 | 横穴墓 | 古代 |
| 20041 | 沢尻貝塚 | 貝塚 | 縄文晩期・弥生・平安 |
| 20042 | 下田堤遺跡 | 製鉄 | 古代? |
| 20043 | 鬼ノ神山貝塚(野山貝塚) | 貝塚・製塩 | 縄文晩期・弥生 |
| 20044 | 鬼ノ神山横穴墓群 | 横穴墓 | 古代 |
| 20045 | 砂山横穴墓群 | 横穴墓 | 奈良・平安 |
| 20046 | 野山遺跡 | 製塩 | 縄文中期・晩期・弥生 |
| 20047 | 弁天A遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 20048 | 弁天B遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 20049 | 弁天C遺跡 | 散布地 | 古代 |
| 20050 | 新田前貝塚 | 貝塚・製塩 | 古代 |
| 20051 | 浜屋敷遺跡 | 横穴墓・石窟 | 古代～中世? |
| 18001 | 大代貝塚(橋本開貝塚) | 貝塚 | 縄文晩期・古代 |
| 18003 | 大代横穴墓群 | 横穴墓 | 古墳後期 |
| 18009 | 大代洞窟 | 貝塚・製塩 | 弥生 |
| 18038 | 特別史跡 柏木遺跡 | 製鉄 | 古代 |
| 18039 | 大代遺跡 | 散布地 | 縄文晩期・古代 |
| 18046 | 榊形貝塚 | 貝塚・製塩 | 縄文・弥生・中期 |
| 18051 | 橋本開横穴墓群 | 横穴墓 | 古墳後期 |
| 18052 | 貞山堀 | 運河 | 近世 |

| 番号 | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|-------|-------------|-------|-----------------|
| 20001 | 林崎貝塚 | 貝塚・製塩 | 縄文晩期・弥生 |
| 20002 | 二月田貝塚(空墓貝塚) | 集落・貝塚 | 縄文後・晩期・弥生・奈良・平安 |
| 20003 | 表浜貝塚 | 貝塚・製塩 | 古墳後期～平安 |
| 20004 | 君ヶ岡貝塚 | 集落・貝塚 | 縄文前・中期 |
| 20005 | 東宮貝塚(鳳寺貝塚) | 貝塚・製塩 | 縄文後・晩期・弥生・平安 |
| 20006 | 国史跡 大木開貝塚 | 集落・貝塚 | 縄文前期～後期 |
| 20007 | 阿川沼貝塚 | 貝塚 | 縄文晩期・弥生 |
| 20008 | 吉田浜貝塚(寺山貝塚) | 貝塚 | 縄文早期 |
| 20009 | 馬放島貝塚 | 貝塚 | 平安 |
| 20010 | 吉田城跡 | 城館 | 中世・近世 |
| 20011 | 薬師堂横穴墓群 | 横穴墓 | 古墳後期～奈良・平安 |
| 20012 | 高山横穴墓群 | 横穴墓 | 奈良・平安 |
| 20013 | 鼻前神社遺跡 | 散布地 | 縄文早期・古代 |

■ : 本書で報告する遺跡 ■ : 津波浸水地域
 ※番号は遺跡登録番号を表す
 0 1km 港
 (S=1/25000)

第1図 七ヶ浜町内および周辺の遺跡

鬼ノ神山貝塚では、晩期後葉（大洞A式期）の製塩炉と考えられる複数の焼礫群が発見され、周辺から製塩土器片が多数出土している（七ヶ浜町教育委員会1982）。

遺跡の立地をみると、早～中期の遺跡は標高30～40mの丘陵平坦部や緩斜面に立地する傾向が強く、後・晩期の遺跡は、標高5～20mの丘陵端部や海岸低地に立地する遺跡が多い。こうした立地の違いは、海水面の変動による汀線の変化や生業形態の違いなど、各時期の自然環境や社会背景と連動していると考えられる。

弥生時代

弥生時代は縄文時代に比して遺跡数が減少し、貝塚の規模も縮小する。縄文時代晩期中葉以降、それまで丘陵頂部や集落周辺の斜面に見られた貝塚が海岸低地や海蝕洞窟に小規模な貝塚が形成されるようになり、貝塚の立地や規模に変化が見られる（菅原2005）。遺跡の立地は縄文時代晩期の遺跡の立地を踏襲しているが、製塩などの作業場として海蝕洞窟を利用する例が散見され、新たな土地利用の動きが見られる。

隣接する多賀城市大代地区に中期の「榊形（囿）式」の標式遺跡である榊形囿貝塚が所在するなど、町内でも中期前葉～中葉の遺跡が多く所在している。町内の遺跡としては、東宮浜地区の東宮貝塚（鳳寿寺貝塚）、水浜遺跡、代ヶ崎浜地区の清水洞窟貝塚、吉田浜地区の二月田貝塚（空墓貝塚）、松ヶ浜地区の林崎貝塚、汐見台地区の鬼ノ神山貝塚などが挙げられる。東宮貝塚（鳳寿寺貝塚）は標高7mの丘陵斜面部と斜面下の低地に所在する貝塚・生産遺跡である。これまでの調査で中期の製塩遺構が検出され、弥生土器や製塩土器、ベンケイガイ製貝輪などが出土している（宮城県塩釜女子高等学校社会部1965、七ヶ浜町教育委員会2019）。清水洞窟貝塚は海蝕洞窟を利用した遺跡で、中期の土器を中心に縄文時代晩期～古代の製塩土器、骨篋などが出土している（大場1943・1948、七ヶ浜町教育委員会2010）。二月田貝塚では谷部の低地から中期前葉～中葉を主体とする遺物包含層が検出され、異形土器やクルミ・トチなどの植物遺存体が出土した（七ヶ浜町教育委員会2016）。また、表採資料として穂摘具（石庖丁）が見つかっており、丘陵に挟まれた細長い谷地で小規模な稲作も行われていた。

古墳時代～平安時代

七北田川下流から河口に位置する多賀城市や利府町では、円墳や中小の円墳からなる古墳後期の古墳群が築造され、その周辺の集落跡からも古墳前期～後期の遺物が出土している。仙台湾沼向遺跡の調査成果から仙台湾沿岸部の古墳時代の景観復元も試みられている（仙台市教育委員会2010）。町内ではこれまで古墳時代の遺跡の調査例がなく不明な点が多かったが、近年の調査で長須賀遺跡から古墳後期の底部穿孔壺が出土し、表浜貝塚から古墳後期の小規模な貝塚が確認されるなど、古墳時代後期から飛鳥時代の様相が徐々に明らかになっている（七ヶ浜町教育委員会2016）。

町内には、湊浜地区の榊形囿横穴墓群（7世紀末～10世紀）、砂山横穴墓群（7世紀後半～8世紀初頭）、薬師堂横穴墓群、花渕浜地区の高山横穴墓群、東宮浜地区の水浜横穴墓など多数の横穴墓が点在している。これら横穴墓の多くは、海蝕や風化による崩落、倉庫や防空壕への転用といった後世の改変を受けており、築造当初の姿を残しているものは少ない。湊浜地区の横穴墓群は多賀城市大代地区の大代横穴墓群を起点とし、湊浜・松ヶ浜地区の沿岸部まで続く丘陵斜面部に築かれた本町最大規模の横穴墓群である。砂山横穴墓群では13基の横穴墓が確認され、土師器、須恵器、直刀、ガラス玉などが出土した（宮城県教育委員会1976）。薬師堂横穴墓群では昭和45（1970）年に東北学院大学工学部技術史研究会による調査が行われ、開口した横穴墓を10基確認している。横穴墓は風化や後世の著しい改変を経ていたため、出土遺物は刀子片と考えられる金属製品1点が出土したのみである。高山横穴墓群では15基以上の横穴墓が確認され、新たに発見された横穴墓の羨道部から板状耳付壺（三

耳壺)や長頸壺などが出土している(七ヶ浜町教育委員会2016)。清水洞窟貝塚では古代において海蝕洞窟を墓場として利用しており、昭和17(1942)年の調査では幼児を含む26体の人骨が出土している。奈良・平安時代の遺跡は東宮浜地区の東宮貝塚(鳳寿寺貝塚)や左道遺跡、水浜遺跡、花瀧浜地区の長須賀遺跡や表浜貝塚、汐見台地区の鬼ノ神山貝塚などがある。これらの多くが海岸に面する緩斜面や海岸の背後地などに立地している。表浜貝塚では「宮木」の刻書のある須恵器片が出土しており、8世紀前半~中頃と考えられる「宮城郡」の成立や「宮木」から「宮城」への表記の移行に関する重要な資料である(七ヶ浜町教育委員会2016)。水浜遺跡では平安時代の竪穴住居跡3棟と掘立柱建物跡1棟、製塩炉13基を検出している(七ヶ浜町教育委員会1993)。左道遺跡ではこれまでの調査で平安時代の竪穴住居跡が32棟検出され(七ヶ浜町教育委員会1992)、近年の調査ではカマドを南側に構築する竪穴住居跡1棟を検出している。古代の重要な港である塩竈を意識した遺跡であると考えられる。清水洞窟貝塚や表浜貝塚、長須賀遺跡では開窩式離頭銚や複合釣針(擬餌針)が出土しており、積極的な海産資源の利用がうかがえる。また、東宮貝塚(鳳寿寺貝塚)や表浜貝塚では集落内の祭祀・儀礼の様相を知る資料として卜骨が出土している。花瀧浜地区の鼻節神社(町指定文化財)には、周辺で採れた昆布やアワビなどの海産物を陸奥国府多賀城へ供給する「厨」の印である「国府厨印」(町指定文化財)が伝わっており、古代の七ヶ浜と多賀城との関係を伝える貴重な資料である。

鎌倉時代~江戸時代

鎌倉時代以降の遺構・遺物は少ないが、湊浜地区の湊浜薬師堂の磨崖仏(町指定文化財)は中世の信仰の様相を伝える資料として特筆される。磨崖仏は平安時代末~鎌倉時代前半の作とされる7体の薬師如来坐像で、薬師堂横穴墓群を構成する横穴墓であった洞窟の奥壁に彫られたものである。現在はこのうち4体が残存し、慈覚大師(円仁)が一夜で彫ったという伝承が残る。また、磨崖仏の間には14世紀頃と考えられる五輪塔の彫刻も残る。境内には慈覚大師お手植えの伝承が残るカヤの大木が現生している。また、代ヶ崎浜地区には梵字による阿弥陀曼荼羅が描かれ、建治3(1277)年の銘を持つ町内最古の石碑「建治三年銘古碑」(町指定文化財)があり、当時の仏教信仰を伝える資料である。周辺には正応2(1289)年や元徳2(1330)年の記年銘を持つ板碑が所在しており(堀野1992)、当初の建立場所から移動しているものの、代ヶ崎地区には古い記年銘の板碑が集中している。

中・近世の城館跡としては、半島東部の海岸段丘上に築かれた花瀧城跡(花瀧浜地区)や吉田城跡(吉田浜地区)がある。花瀧城跡は留守氏の家臣である花淵紀伊の居城とされ、漁業の振興と鼻節神社の保護を行ったとされる。また、吉田城跡は同じく留守氏の家臣の吉田右近の居城とされる。かつて大規模な空堀が存在したと伝わる。ともに詳細な調査が行われていないため、縄張りなどについては不明である。

江戸時代の万治~寛文・延宝年間に行われた貞山堀(御舟入堀)の開削や七北田川の改修は、七ヶ浜周辺の交通や物流に大きな変化をもたらした。貞山堀は江戸・明治時代にかけて阿武隈川河口から旧北上川河口を結ぶ運河として順次整備された、全長約42kmにも及ぶ全国最長の運河である。町の西部を南北に貫く形で塩竈市牛生から多賀城市大代を結ぶ御舟入堀が寛文13・延宝元(1673)年頃開通し、これ以降七ヶ浜半島は陸地から分断される形となった。その直前の寛文10(1670)年には七北田川の河口を湊浜から蒲生村(仙台市宮城野区蒲生)に付け替える工事が完了し、長く七北田川・砂押川の河口の港として栄えた湊浜一帯が衰退するなど、七ヶ浜周辺の状況は大きく変化した。

明治22(1889)年には集落が点在する7つの浜を合わせ、七ヶ浜村が誕生した。昭和34(1959)年には町制を施行し、現在に至っている。七ヶ浜村誕生前年の明治21(1888)年には東北地方最初の海水浴場として菖蒲田海水浴場が開設した。隣接する花瀧浜高山・戸谷場地区の丘陵には外国人別荘地が順次整備された。これを契機に別荘地を訪れる外国人と地域住民の交流が始まり、現在は国際交流

の町として知られている。

第2章 調査計画と実績

第1節 調査体制

本書に掲載した埋蔵文化財の発掘調査と整理作業は宮城県教育庁文化財課の協力・助言を得ながら、七ヶ浜町教育委員会が主体となり、生涯学習課文化財係が担当した。職員の体制は下記のとおりである。

教 育 長：武田 光彦

生涯学習課長：庄子 克也（平成27年度）、小野 豊（平成28年度）

鈴木 雅浩（平成29年～令和2年度）

文化財係長：菊池 克宏（平成27～29年度）、小野 豊（平成30年度）

加納 貴美子（令和元・2年度）

※平成30年～令和2年度は歴史資料館長兼文化財係事務取扱

主任主査：田村 正樹

非常勤職員：佐々木 広美（平成27年度）、鈴木 喜雄（平成27～30年度）、小澤 恵（平成27～30年度）

木村 由美子（平成28年～令和2年度）、村上 理江子（令和元・2年度）

矢本 聡子（令和2年度）

※令和2年度は会計年度任用職員

発掘調査作業員・整理作業員

平成27年度：赤間 正雄、伊藤 美輪、木村 由美子、佐藤 要市、虎井 優子、廣野 徳、舟山 武

矢竹 真由美、矢本 聡子、吉田 麻美

平成28・29年度：佐藤 要市、矢本 聡子、吉田 麻美

平成30年～令和2年度：吉田 麻美

第2節 調査計画と実績

本書で報告する調査は、復興庁より復興交付金事業の基幹事業に位置付けられる「埋蔵文化財発掘調査事業（A-4事業）」の「東日本大震災復興交付金」を第1回目の申請（平成24年3月）において得て、七ヶ浜町域を対象として平成27年度下半期（平成27年9月～平成28年3月）及び平成28年度、令和元年度、令和2年度に実施したものである。尚、平成29・30年度においては本事業の対象となる調査はなかった。個人及び中小企業などによる復興事業については、事前協議や計画変更により確認調査や本発掘調査に至る事案はなかった。七ヶ浜町及び宮城県による復興事業に伴う確認調査については、早期に遺跡の内容を把握し、調整を図るために6事業7遺跡の調査（令和3年2月末現在）を実施した。内訳は平成27年度下半期が1事業1遺跡、平成28年度が2事業2遺跡、令和元年度が3事業3遺跡、令和2年度が1事業1遺跡である（第1表）。

第3節 調査方法

調査は遺跡の範囲、内容、時代などの把握及び検出遺構の記録を目的とし、宮城県教育庁文化財課の指導・助言を受けながら、必要最小限の調査とした。事業主体者より提供を受けた計画概要や計画図などを基に、地権者等の同意を得て計画範囲内に調査区（トレンチ）を設定した。その範囲に対して、重機及び人力で表土や盛土などを掘削、除去した。掘削後、人力で精査し、遺構検出、遺構観察、断面観察、平面図・断面図などの作成、写真撮影を行い、調査の工程が完了した後に埋め戻しを行っ

| 番号 | 本書報告 | 報告済 | 調査年度 | 調査原因 | 事業主体 | 調査地 | 調査面積 | 調査期間 | 遺構・遺物等の有無 内容 |
|----|------|-----|-----------------------------|---------------------------------------|------------------|---------------------------|-------|-------------------------------------|----------------------------------------|
| 1 | ● | ● | | 諏訪神社前遺跡 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町菅浦田浜字林台 | 220㎡ | 平成24年6月1日～6月19日 | 縄文土器、製塩土器（縄文晩期） |
| 2 | ● | ● | | 長須賀遺跡（3次） 泉道改良 | 宮城県仙台土木事務所 | 七ヶ浜町花測浜字長須賀 | 1000㎡ | 平成24年6月22日～8月10日 | 古墳後期～平安：製塩炉、貝塚、遺物包含層 |
| 3 | ● | ● | 平成24年度 2012年度 | 高山横穴墓群 防潮堤改修 | 宮城県仙台土木事務所 | 七ヶ浜町花測浜字浜沼 | 100㎡ | 平成24年6月27日～6月29日 平成24年7月29日～8月3日 | 古墳後期～平安：横穴墓3基、土師器、須恵器 |
| 4 | ● | ● | | 峯貝塚（隣接地） 災害公営住宅・高台住宅団地・ 地区避難所整備 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町代々嶋浜字立花 | 10㎡ | 平成24年11月13日～11月22日 | 遺構・遺物なし |
| 5 | ● | ● | | 二月田貝塚 （隣接地） | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町吉田浜字台 | 129㎡ | 平成25年4月5日～4月17日 | 遺構・遺物なし |
| 6 | ● | ● | 平成25年度 2013年度 | 表浜貝塚（5次） 都市公園表浜緑地整備 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町花測浜字表浜一、表浜二、 浜沼 | 1120㎡ | 平成25年8月1日～平成26年1月30日 | 古墳後期～平安：製塩炉、貝塚、土師器、須恵器 |
| 7 | ● | ● | | 長須賀遺跡（4次） 雨水排水路整備 造成発生土仮置場整備 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町花測浜字長須賀 | 210㎡ | 平成26年2月13日～4月16日 | 奈良・平安：遺物包含層、製塩土器 |
| 8 | ● | ● | | 林崎貝塚（2次） | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町松ヶ浜字新林崎 | 79㎡ | 平成26年5月8日～7月18日 | 縄文晩期：製塩炉、貝塚、遺物包含層 |
| 9 | ● | ● | | 阿川沼貝塚 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町菅浦田浜字新小塚 | 26㎡ | 平成26年7月18日～7月29日 | 遺構・遺物なし |
| 10 | ● | ● | | 沢上貝塚 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町代々嶋浜字沢上 | 19㎡ | 平成26年8月20日～8月29日 | 遺構・遺物なし |
| 11 | ● | ● | | 東原遺跡 | 宮城県仙台地方振興事務所 | 七ヶ浜町菅浦田浜字新東原 | 86㎡ | 平成26年9月5日～10月14日 | 遺構・遺物なし |
| 12 | ● | ● | 平成26年度 2014年度 | 二月田貝塚 神明遺跡 | 宮城県仙台地方振興事務所 | 七ヶ浜町吉田浜字新二月田 | 33㎡ | 平成26年10月15日～11月21日 | 縄文晩期・弥生：遺物包含層、縄文土器、弥生土器、植物遺存体 |
| 13 | ● | ● | | 笹山貝塚 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町代々嶋浜字向田 | 10㎡ | 平成26年10月30日～11月21日 | 遺構・遺物なし |
| 14 | ● | ● | | 鼻筋神社遺跡 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町松ヶ浜字笹山 | 134㎡ | 平成26年11月19日～平成27年1月23日 | 遺構・遺物なし |
| 15 | ● | ● | | 表浜貝塚（6次） | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町花測浜字新清水沢 | 13㎡ | 平成27年1月15日～1月23日 | 遺構・遺物なし |
| 16 | ● | ● | | 表浜貝塚（6次） | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町花測浜字表浜一、表浜二、 浜沼 | 30㎡ | 平成27年2月17日～3月17日 | 遺構・遺物なし |
| 17 | ● | ● | 平成27年度 2015年度 | 表浜貝塚（7次） 都市公園表浜緑地整備 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町花測浜字表浜一、表浜二、 浜沼 | 47㎡ | 平成27年5月22日～7月8日 | 遺構・遺物なし |
| 18 | ● | ● | | 表浜貝塚（8次） 都市公園表浜緑地整備 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町代々嶋浜字土浜 浜沼 | 53㎡ | 平成27年9月29日～12月18日 | 奈良・平安：貝塚・遺物包含層、炉跡、土師器、 須恵器、製塩土器 |
| 19 | ● | ● | 平成28年度 2016年度 | 土浜A貝塚 土浜B貝塚 阿川沼貝塚 | 宮城県仙台塩釜港 港事務所 | 七ヶ浜町代々嶋浜字小塚 | 192㎡ | 平成28年11月29日～12月7日 | 遺構・遺物なし |
| 20 | ● | ● | | 真山堀 通学路整備 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町菅浦田浜字小塚 | 63㎡ | 平成29年2月14日 | 遺構・遺物なし |
| 21 | ● | ● | 令和元年度 （平成31年度） 2019年度 | 長須賀遺跡 二月田貝塚 | 七ヶ浜町 | 七ヶ浜町遠山5丁目 宮城県仙台地方振興事務所 | 34㎡ | 令和元年10月30日・31日 | 遺構・遺物なし |
| 22 | ● | ● | | 長須賀地区多目的広場整備 農山漁村地域復興基盤 総合整備事業 | 宮城県仙台地方振興事務所 | 七ヶ浜町吉田浜字新二月田 | 106㎡ | 令和元年11月26日 | 縄文晩期：遺物包含層 縄文土器、製塩土器 |
| 23 | ● | ● | | 農山漁村地域復興基盤 総合整備事業 | 宮城県仙台地方振興事務所 | 七ヶ浜町松ヶ浜字新林崎 | 132㎡ | 令和元年12月12日 | 遺構・遺物なし |
| 24 | ● | ● | 令和2年度 2020年度 | 林崎貝塚（3次） 総合整備事業 | 宮城県仙台地方振興事務所 | 七ヶ浜町松ヶ浜字新林崎 | 724㎡ | 令和2年9月9日～4月14日 令和2年11月17日～12月12日 | 縄文晩期土坑、貝塚、遺物包含層、縄文土器、 製塩土器、動物・植物遺存体 |

第1表 復興交付金事業による発掘調査実施遺跡一覧表 平成24年～令和2年度

た。掘削は遺構面検出までを基本としたが、一部で地山面まで掘り下げを行った。

第3章 震災復興事業関連遺跡の発掘調査（確認調査）

第1節 表浜貝塚（第2～14図、写真図版1～5）

（1）遺跡の概要

表浜貝塚は七ヶ浜町花瀨浜字表浜一、表浜二、浜沼地内に所在する古墳時代後期～平安時代の集落跡、貝塚、製塩遺跡である（第3図）。町内には長須賀遺跡や水浜遺跡など主に陸奥国府多賀城へ塩を供給したと考えられる製塩遺跡が点在しており（第2図）、本遺跡もこのような遺跡の一つである。遺跡は表浜海岸背後の浜堤上に立地し、震災以前は住宅地と畑地が広がっていたが、現在はその大半が都市公園湊浜緑地の敷地となっている（巻頭写真3）。これまでに昭和63(1988)年、平成元(1989)年、平成11(1999)年に個人住宅建替えに伴う確認調査（1～4次調査）、平成25～27年度上半期に都市公園整備に伴う確認調査（5～7次調査）が行われている（第4図）。1～4次調査では竪穴住居跡や炉跡、溝跡を検出し（第10～13図）、土師器や須恵器、製塩土器、骨角製品、卜骨、動物遺存体などが出土している。5～7次調査では炉跡や土坑、貝塚、溝跡を検出し、三河湾沿岸地域の特徴を有する製塩土器片や「宮木」の刻書のある須恵器片などが出土している（七ヶ浜町教育委員会2016）。また、遺跡近くの丘陵崖面には奈良・平安時代の土師器・須恵器が出土した高山横穴墓群が所在し、本遺跡に関連する横穴墓と考えられる。平成25年度の調査では新たに3基の横穴墓（1～3号墓）を検出し、2号墓の羨道部からは板状耳付瓶（三耳瓶）と長頸壺などが出土している（七ヶ浜町教育委員会2016）。

（2）調査要項

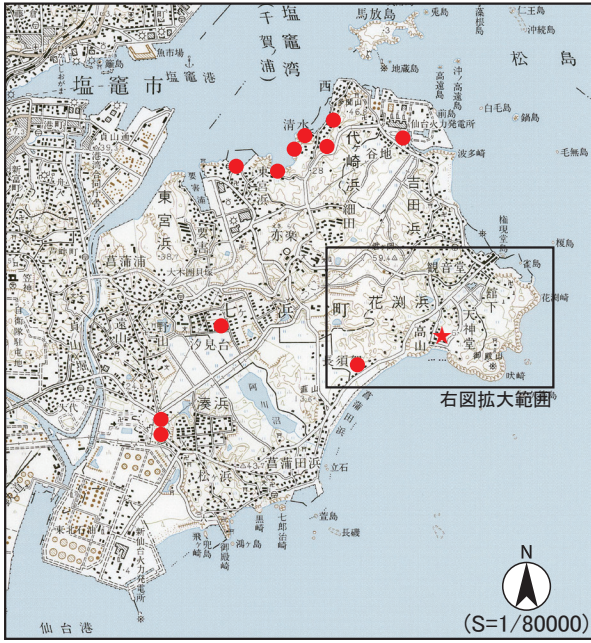
遺跡名 表浜貝塚（宮城県遺跡地名登録番号 20003）
調査地 七ヶ浜町花瀨浜字表浜一、表浜二、浜沼地内
調査原因 都市公園整備
調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）
調査期間 平成27（2015）年9月29日～12月18日（8次調査）
対象面積（事業面積） 50,406㎡ 調査面積 53㎡

（3）調査の方法

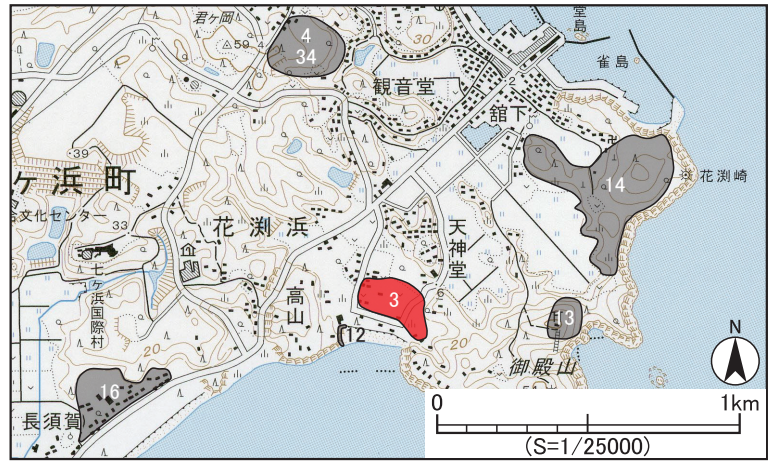
花瀨浜表浜地区は、高山外国人別荘地に挟まれた表浜海岸の背後に住宅地や畑地が点在していたが、東日本大震災による津波で甚大な被害を受けた。これにより表浜地区は現地での住宅再建などができない災害危険区域（レッドゾーン）に指定された。町復興推進課よりこの区域の一部において都市公園を整備する計画が示され、事業内容を確認したところ、把握されている遺跡範囲のほぼ全体が計画地にかかることが判明した。過去の調査成果から計画地内に遺構などが残存していると想定されたため、遺構の残存状況、遺跡の性格、遺跡の範囲などを確認するために、平成25～27年度に4次にわたる調査を実施した。5次調査では町道天神堂線に囲まれた範囲を中心に14本のトレンチ（1～14トレンチ）、6次調査では計画地西側の町道沿いに5本のトレンチ（15～19トレンチ）、7次調査では計画地東側に6本のトレンチ（20～25トレンチ）をそれぞれ設定し、調査を行った（第4・5図）。8次調査では計画地東端付近に6本のトレンチ（26～31トレンチ）を設定し、重機を使用して掘削を行った。調査区北側（26～29トレンチ）は町道より一段低くなっており旧来の地形が残存しているが、南側（30・31トレンチ）では過去の盛土造成により南東側に向かって高くなっている。

表浜貝塚

| 所在地 | | 時代 | |
|---------------|-------------------------|-------------------------|----|
| 七ヶ浜町花洲浜字表浜一ほか | | 古墳後期～平安 | |
| 遺跡番号 | 過去の調査歴 | 種別 | 立地 |
| 20003 | 1988・89・99年 2013・15年 | 貝塚・集落跡 生産遺跡 | 浜堤 |
| 検出遺構等 | | 竪穴住居跡、製塩遺構、遺物包含層、土坑 | |
| 出土品 | | 土師器・須恵器・製塩土器・「宮木」刻書土器ほか | |

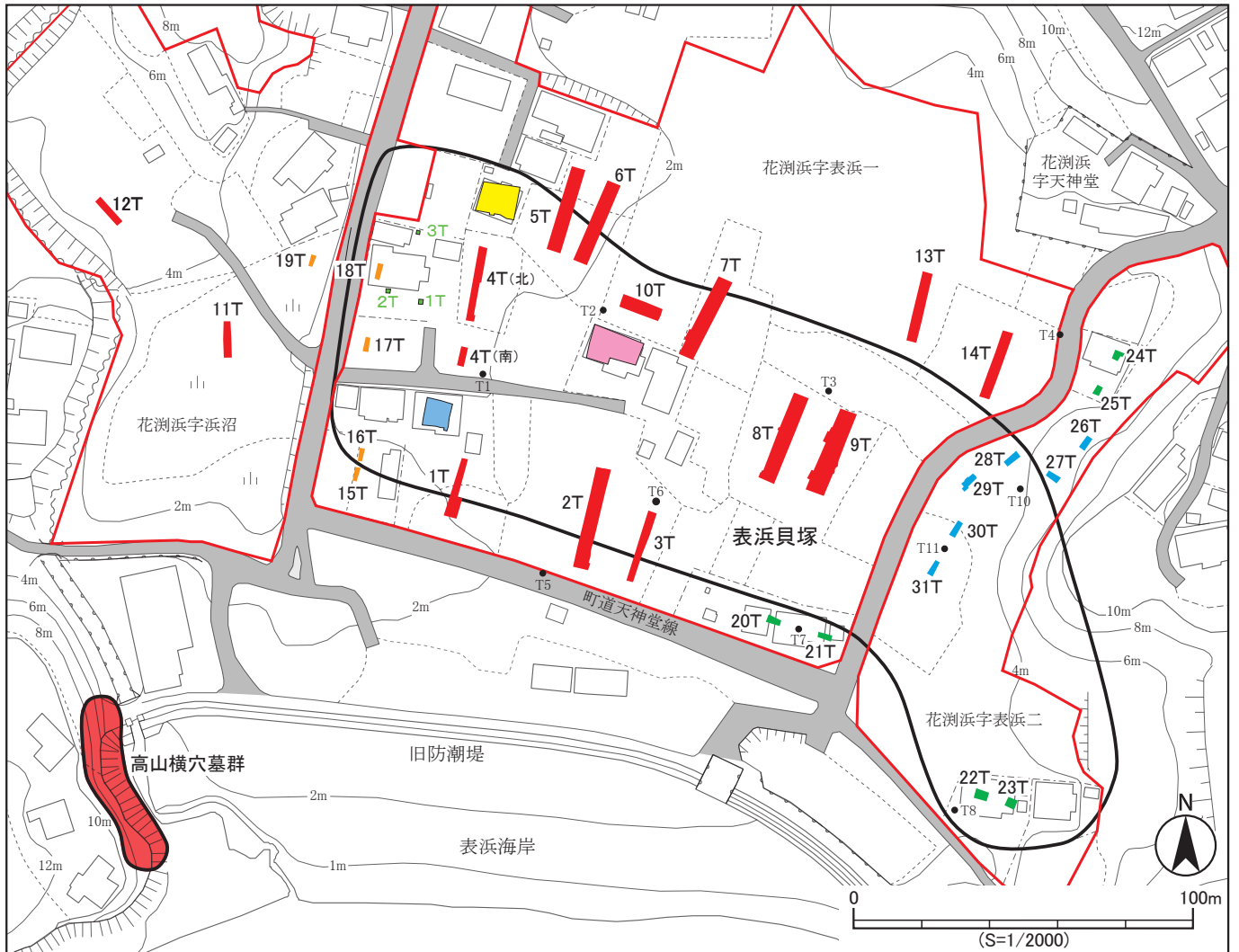


第2図 七ヶ浜町内の古代製塩遺跡



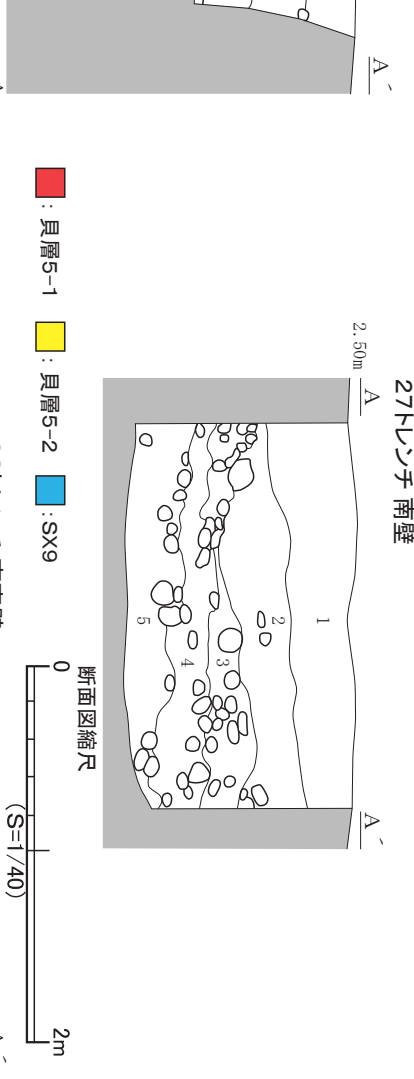
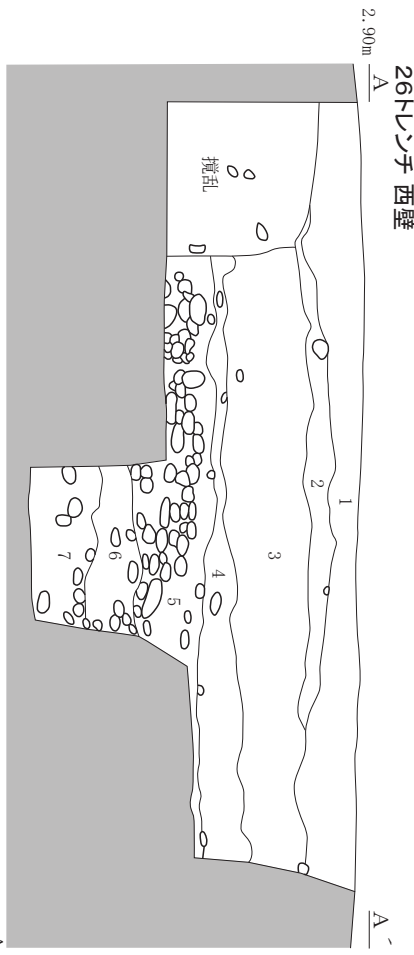
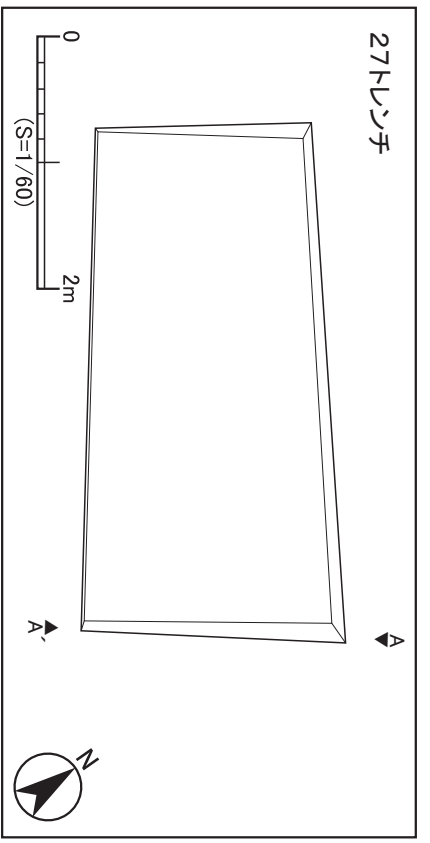
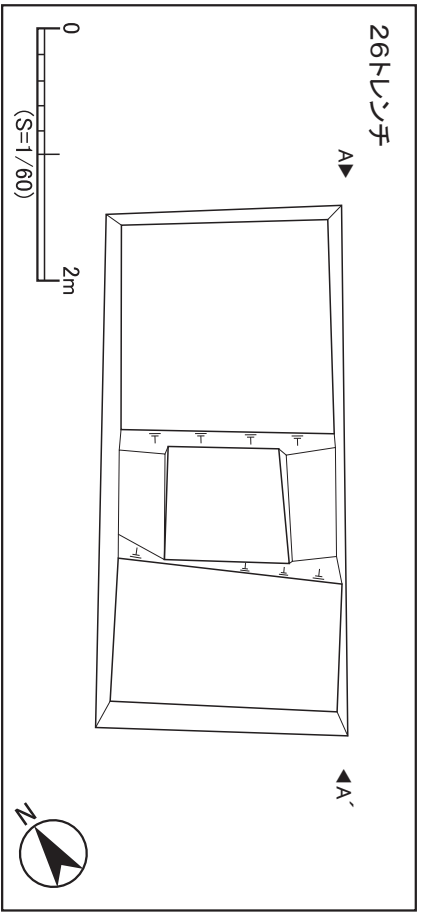
第3図 表浜貝塚の位置と周辺の遺跡

周辺の遺跡 4：君ヶ岡貝塚（縄文） 12：高山横穴墓群（奈良・平安） 13：鼻節神社遺跡（縄文・平安） 14：花洲城跡（中世・近世） 16：長須賀遺跡（古墳後期～平安） 34：藤ヶ沢貝塚（縄文）



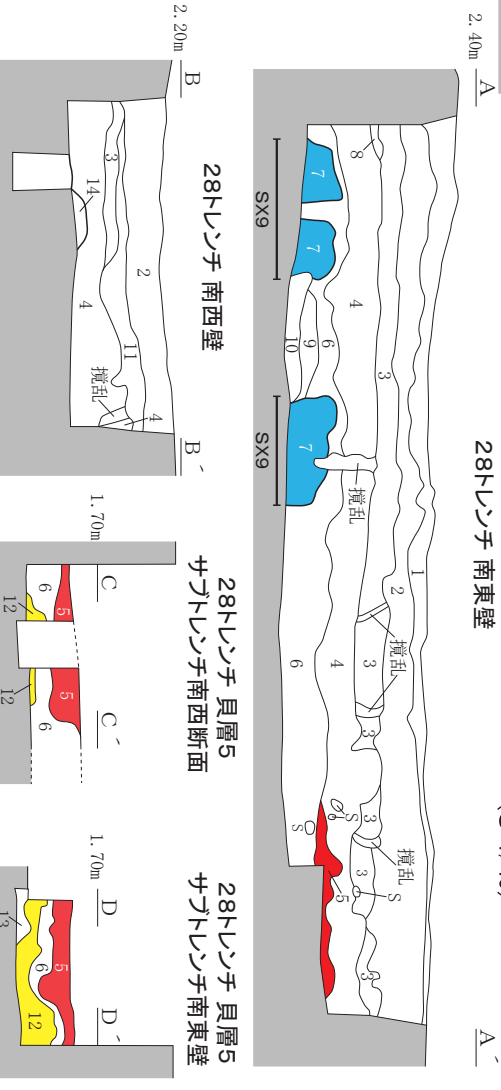
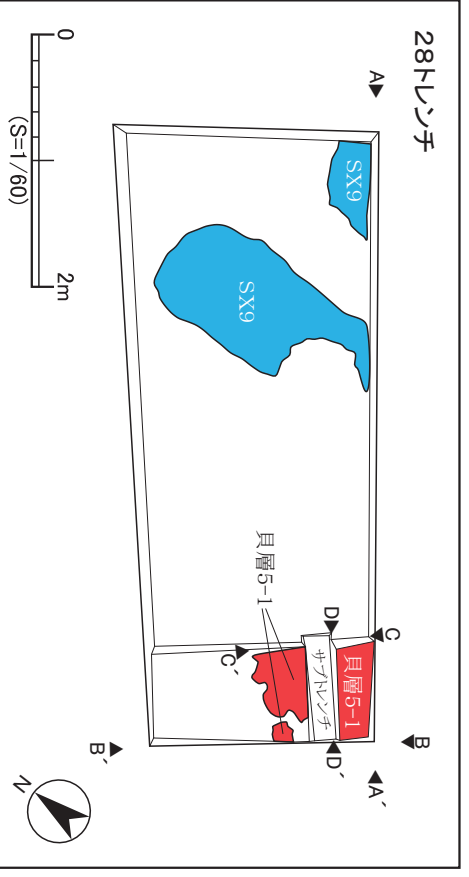
■：昭和63年度（1次調査） ■：平成元年度（2次調査） ■：平成元年度（3次調査） ■：平成11年度（4次調査） ■：平成25年度（5次調査）
■：平成26年度（6次調査） ■：平成27年度（7次調査） ■：平成27年度（8次調査） —：事業計画範囲 ※東日本大震災以前の地形図を使用

第4図 1～8次調査トレンチ配置図



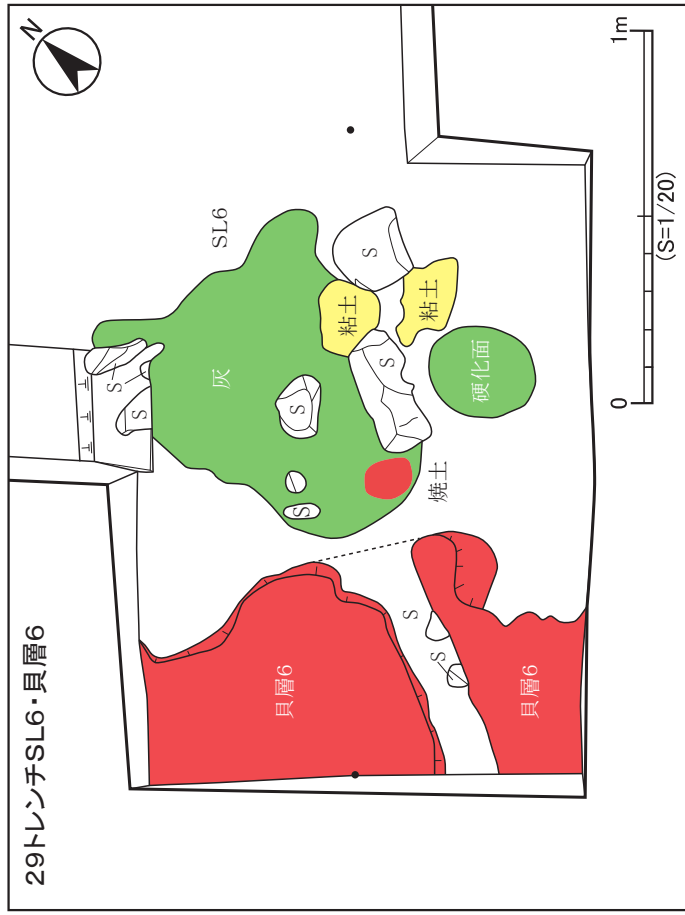
■ : 貝層5-1 ■ : 貝層5-2 ■ : SX9

28トレンチ 南東壁



※26・27 トレンチ堆積土中の不整形の太線はすべて礫を表す

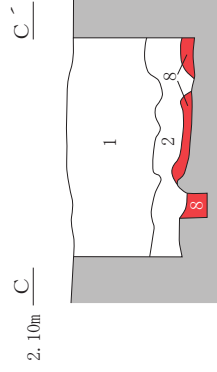
第6図 26～28トレンチ平面図・断面図



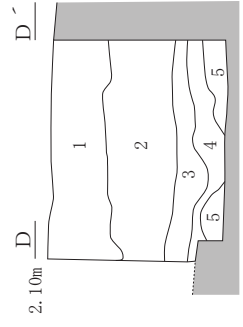
29トレンチ 北東壁



29トレンチ 南西壁①

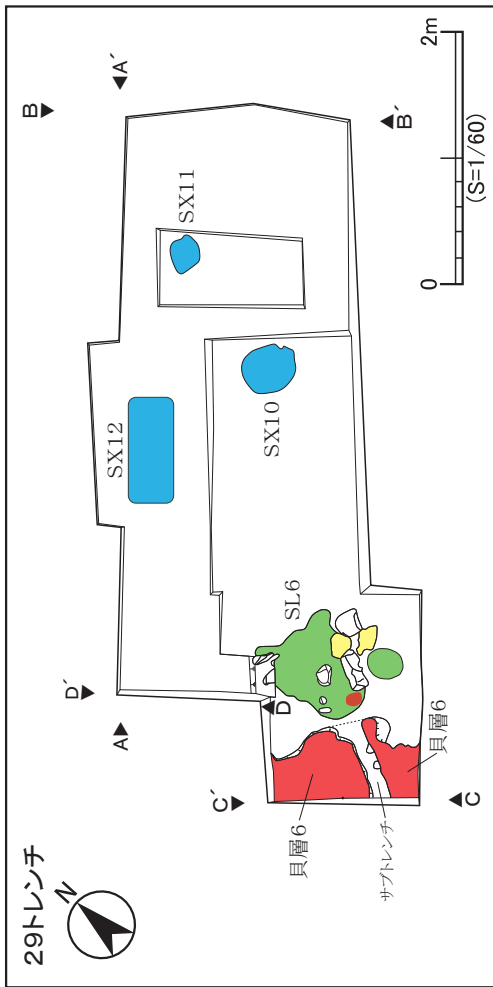


29トレンチ 南西壁②



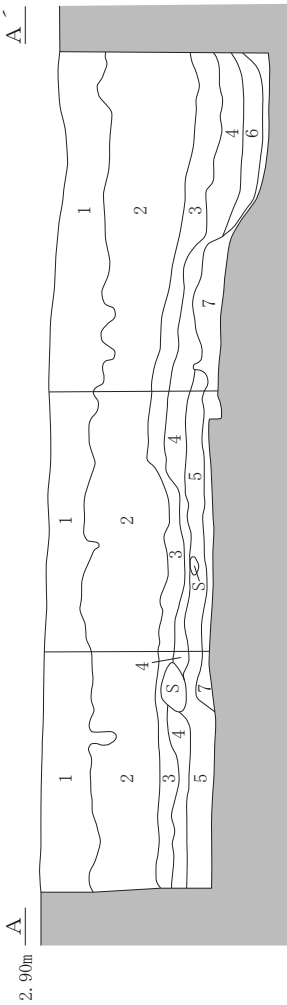
■ : 貝層

断面図縮尺

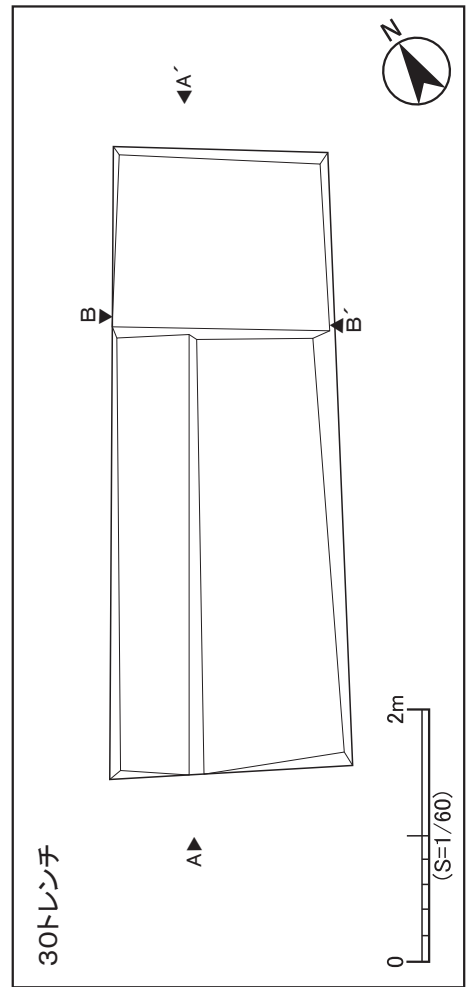


※SX12は推定範囲

29トレンチ 北西壁



30トレンチ

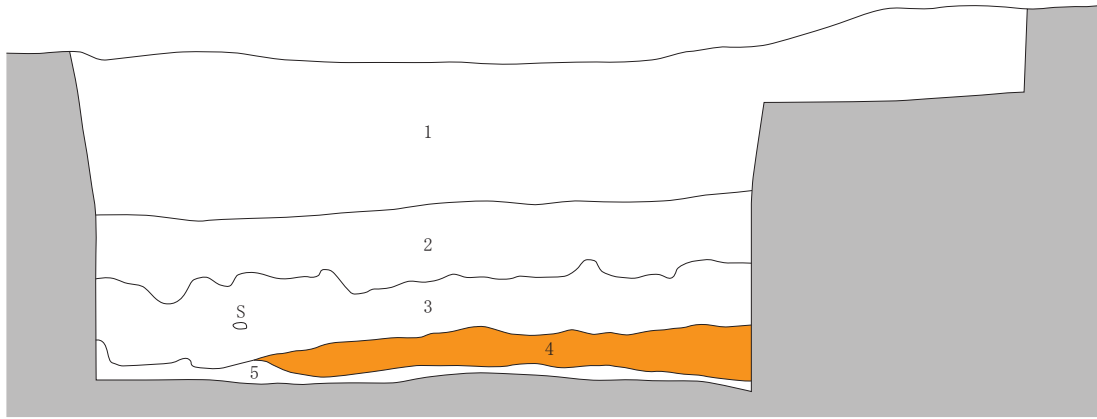


第7図 29トレンチ平面・断面図

30トレンチ 南西壁

3.10m A

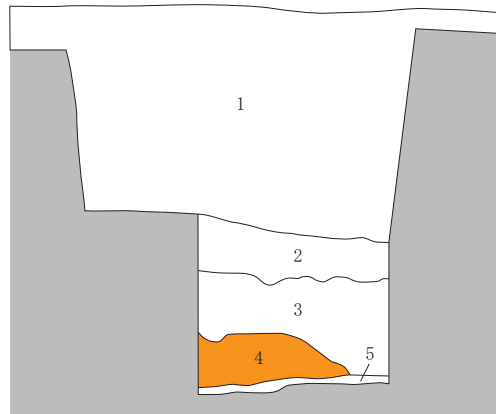
A



30トレンチ 北東壁

3.10m B

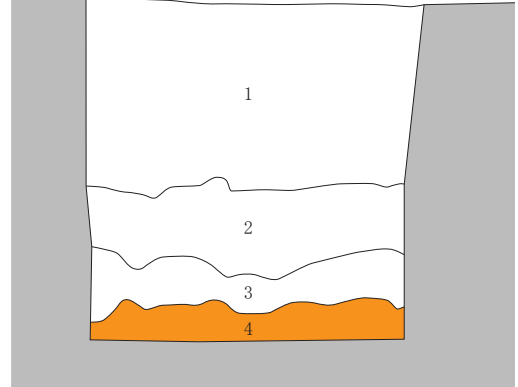
B



31トレンチ 南西壁

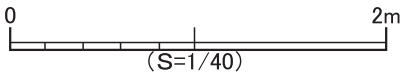
2.70m A

A

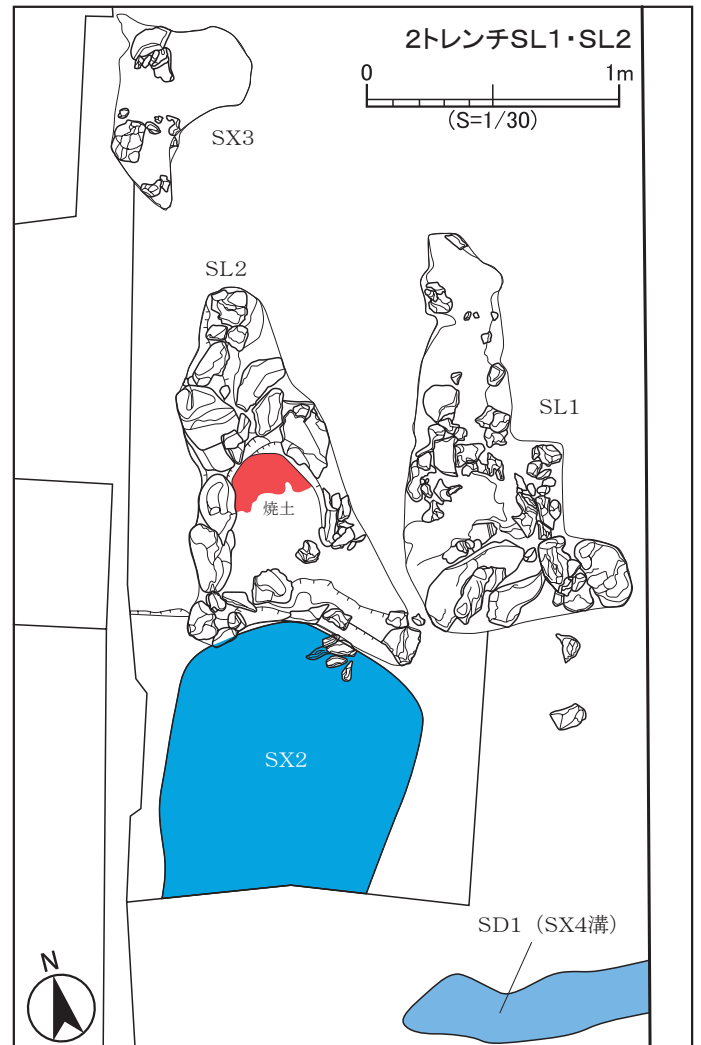
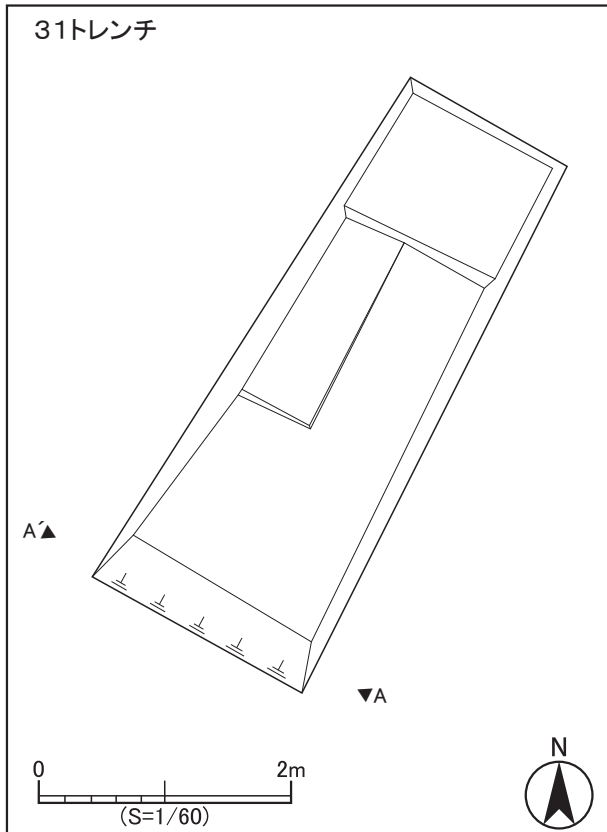


■ : 遺物包含層

断面図縮尺



2トレンチSL1・SL2
0 1m
(S=1/30)



第8図 30・31トレンチ平面図・断面図 2トレンチ炉跡平面図

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | | 特徴 |
|-----|-----|-------|--------|---------|-------------------------------------------------|
| 1 | 土層 | 中粒砂 | オリーブ褐色 | 2.5Y4/4 | 表土、盛土、大小の礫を含む |
| 2 | 土層 | - | 黒褐色 | 10YR3/2 | 盛土前の表土 凝灰岩片・小礫を含む |
| 3 | 土層 | - | 暗褐色 | 10YR3/3 | 凝灰岩粒を含む(面積割合3~5%) 27レンチ1層に対応 |
| 4 | 土層 | - | 黒褐色 | 10YR2/2 | 凝灰岩粒・礫を含む(面積割合3%) 漸移層 |
| 5 | 砂層 | 中粒砂 | 黒色 | 10YR2/1 | 直径5~20cm程度の礫を含む(面積割合15~20%) |
| 6 | 砂層 | 中~細粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 直径5~15cm程度の礫を含む(面積割合7~10%) 27レンチ4層に対応 |
| 7 | 砂礫層 | 粗~中粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 直径数cm~15cm程度の礫を含む 上層に径の大きな礫・中層に砂利のような小石が多く・下層は砂 |

第2表 表浜貝塚 26レンチ土層観察表

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | | 特徴 |
|-----|----|-------|-----|---------|---------------------------------------------------|
| 1 | 土層 | - | 暗褐色 | 10YR3/3 | 表土、凝灰岩粒を含む(面積割合3~5%) |
| 2 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 直径5~10cm程度の礫を含む(面積割合10%) 礫は3層との境界付近に多い |
| 3 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 直径5~15cm程度の礫を含む(面積割合15~20%) |
| 4 | 砂層 | 中~細粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 直径5~15cm程度の礫を含む(面積割合7~10%) 凝灰岩片を含む |
| 5 | 砂層 | 中粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 直径5~20cm程度の礫を含む(面積割合20%) 礫の下層に凝灰岩片を含む(面積割合15~20%) |

第3表 表浜貝塚 27レンチ土層観察表

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | | 特徴 |
|-----|------|-----|-----|---------|---------------------------------------------------|
| 1 | 土層 | 中粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 表土、凝灰岩片を一部に含む |
| 2 | 砂層 | 細粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 凝灰岩粒を含む(面積割合2~3%) |
| 3 | 砂層 | 細粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/3 | 凝灰岩粒を含む(面積割合2~3%) |
| 4 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 凝灰岩粒・礫を含む(面積割合3~5%) |
| 5 | 混土貝層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 破碎された貝殻(カキ主体)を含む(面積割合25~30%) |
| 6 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 凝灰岩片を含む(面積割合7~10%) 黄褐色(2.5Y5/4)の粘土(8層)が斑状に入る |
| 7 | 粘土層 | - | 黄褐色 | 2.5Y5/4 | SX9、凝灰岩片を含む(面積割合3~5%) |
| 8 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/3 | 黒褐色(10YR3/2)の粘質土(粘土)が層状に含まれる 凝灰岩片を含む(面積割合2~3%) |
| 9 | 砂層 | 細粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | |
| 10 | 砂層 | 細粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 礫を含む(面積割合2~3%) |
| 11 | 砂層 | 細粒砂 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 同色の中粒砂が層状に一部堆積している 凝灰岩粒・炭化物を含む(面積割合2%) |
| 12 | 混土貝層 | 細粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 破碎された貝殻を含む(面積割合20~25%) 5層の混土貝層より下にある 南側ほど貝の混入率が低い |
| 13 | 砂層 | 細粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | |
| 14 | 混土貝層 | 細粒砂 | 黒色 | 10YR2/1 | 破碎された貝殻を含む(面積割合25~30%) |

第4表 表浜貝塚 28レンチ土層観察表

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | | 特徴 |
|-----|------|-----|-----|---------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 | 土層 | 細粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/4 | 表土、凝灰岩粒を含む(面積割合3~5%) 暗灰黄色(2.5Y4/2)の細粒砂がSL6炉跡と貝層6付近で認められる |
| 2 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 破碎された土器片・凝灰岩粒・炭化物・灰白色火山灰ブロック(十和田A)を含む(面積割合5~7%) 灰白色火山灰ブロックは3層との境界付近に入る |
| 3 | 混貝砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/3 | 破碎された貝殻・土器片・炭化物・凝灰岩粒・灰白色火山灰ブロック(十和田A)を含む(面積割合10~15%) 灰白色火山灰ブロックは2層との境界付近に入る |
| 4 | 混貝砂層 | 細粒砂 | 黒褐色 | 10YR3/2 | 破碎された貝殻・土器片・凝灰岩粒・礫・褐色(10YR4/6)の細粒砂(7層の地山)を含む 褐色の細粒砂は部分的に斑状に入る(面積割合7~10%) |
| 5 | 混貝砂層 | 中粒砂 | 黒色 | 10YR2/1 | 破碎された貝殻・土器片・凝灰岩粒・礫・褐色(10YR4/6)の細粒砂(7層の地山)を含む 褐色の細粒砂は部分的に斑状に入る(面積割合10%)、SX11は5層に覆われている |
| 6 | 砂層 | 細粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 土器片・褐色(10YR4/6)の細粒砂(7層の地山)を含む(面積割合3~5%) 褐色の細粒砂は部分的に斑状に入る 6層は北東側に傾斜する7層に沿って窪み箇所に堆積している |
| 7 | 地山 | 細粒砂 | 褐色 | 10YR4/6 | 北東側に向かって低くなっている 直径10cm程度の丸石を含む(面積割合5~7%) 7層でも上面 5層または6層の境界付近に多い |
| 8 | 混土貝層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 二枚貝・巻貝(カキ・ハマグリ・アカニシなど)を含む SL6炉跡との切り合い関係はない |

第5表 表浜貝塚 29レンチ土層観察表

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | | 特徴 |
|-----|------|-----|--------|---------|---------------------------------------------|
| 1 | 土層 | - | オリーブ褐色 | 2.5Y4/4 | 表土、大小の礫を含む(面積割合25~30%) |
| 2 | 砂層 | 中粒砂 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 盛土以前の表土 破碎された土器片・凝灰岩粒を含む(面積割合3~5%) |
| 3 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 破碎された貝殻・土器片・凝灰岩粒を含む(面積割合3%) |
| 4 | 混貝土層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 破碎された貝殻・土器片・炭化物・被熱した凝灰岩・凝灰岩片を含む(面積割合15~20%) |
| 5 | 砂層 | 細粒砂 | 褐色 | 10YR4/6 | 地山 |

第6表 Dレンチ土層観察表

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | | 特徴 |
|-----|------|-----|--------|---------|------------------------------------------------------------------|
| 1 | 土層 | - | オリーブ褐色 | 2.5Y4/4 | 表土、大小の礫を含む(面積割合25~30%) |
| 2 | 砂層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/3 | 盛土前の表土 破碎された土器片・凝灰岩粒を含む(面積割合3~5%) 30レンチ2層に対応 |
| 3 | 砂層 | 中粒砂 | 黒色 | 10YR2/1 | 破碎された土器片・凝灰岩粒を含む(面積割合3%) 30レンチ3層に対応 |
| 4 | 混貝土層 | 中粒砂 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 破碎された貝殻・土器片・凝灰岩片・灰白色火山灰を含む(面積割合3~20%) 下層ほど30レンチ4層の混貝土層と近似している |

第7表 表浜貝塚 31レンチ土層観察表

今回の調査では、28・29トレンチを中心に炉跡や土坑、溝跡、焼土面、貝層・遺物包含層などを検出した（第5～8図）。また、26・27トレンチでは表土下から直径5～20cm程の円礫を多量に含む暗褐色～黒色の砂層を検出した。他のトレンチでは円礫を含む層は検出されておらず、遺跡に伴うものは不明である。各トレンチの精査後に写真撮影、遺構平面図及びトレンチ平面図、土層断面図の作成を行った。尚、遺構平面図、トレンチ平面図の測量に際しては、以下の任意に設定した測量杭（T-1～T-11）を基準点とし、電子平板による実測作業を行った。調査終了後、重機で埋め戻しを行った。

| | | | |
|------|------------------|----------------|------------|
| T-1 | X = -189012.080m | Y = 21375.371m | 標高値：2.289m |
| T-2 | X = -188993.257m | Y = 21410.733m | 標高値：2.644m |
| T-3 | X = -189017.047m | Y = 21477.039m | 標高値：2.078m |
| T-4 | X = -189000.580m | Y = 21545.168m | 標高値：2.920m |
| T-5 | X = -189070.649m | Y = 21392.986m | 標高値：2.450m |
| T-6 | X = -189049.623m | Y = 21426.342m | 標高値：2.889m |
| T-7 | X = -189087.110m | Y = 21468.281m | 標高値：2.950m |
| T-8 | X = -189140.425m | Y = 21514.113m | 標高値：2.823m |
| T-9 | X = -189135.205m | Y = 21519.048m | 標高値：3.197m |
| T-10 | X = -189045.906m | Y = 21533.464m | 標高値：3.412m |
| T-11 | X = -189063.445m | Y = 21511.140m | 標高値：2.950m |

（4）発見された遺構と遺物

検出された遺構には炉跡1基、土器集中遺構1か所、貝層・遺物包含層3か所、遺物集中遺構1基、火山灰集中遺構1基などがあり（第5～8図）、主要な遺構について説明する。遺物は検出した遺構や遺構外から土師器や須恵器、製塩土器、羽口など150点が出土し、このうち15点を図示した（第9図）。この他、動物遺存体（貝類・獣骨・鳥類骨・魚骨）が出土している。

SL6炉跡（遺構：第5・7図、遺物：第9図） ※註1

29トレンチ南西側の拡張部に位置する。灰や被熱した凝灰岩、粘土、焼土、硬化面が分布する、東西約1.2m、南北約0.75mの範囲を炉跡とした。石組みを伴う炉であると考えられるが、炉の遺存状態は悪い。一部で炉跡の下層から複数の凝灰岩を検出したことから、より古い時期の炉が残存している可能性がある。遺物は炉の周辺から土師器甕や須恵器壺と考えられる破片、厚手の製塩土器片（第9図14）が出土しているが、出土量は少ない。尚、SL6炉跡を覆う黒褐色の砂層（2層）から出土した炭化材（コナラ属クヌギ節）の放射性炭素年代測定を行った結果、11～12世紀頃の年代値が得られていることから、この年代値以前に構築されたと考えられる。

※註1：前報告（七ヶ浜町教育委員会2016）28頁の遺構配置図（第26図）には炉跡4（SL4）が7・29トレンチに存在するが、それぞれ異なる遺構であることから本報告では29トレンチ検出の炉跡を炉跡6（SL6）に訂正した。

SX12土器集中遺構（遺構：第5・7図、遺物：第9図）

29トレンチ中央部の北西壁付近、東西約0.8m、南北約0.4mの範囲から酸化炎焼成の内外無調整の土器、いわゆる赤焼土器の坏5点と高台碗1点（第9図1～6）、非ロクロ成形の土師器甕1点（第9図7）、楕円形の扁平な礫や球形の礫がまとまって出土した。出土状況から土坑に一括廃棄した状態と考えられるが、検出時には遺構のプランは確認できなかった。北西壁の堆積状況から黒褐色の混貝砂層（3・4層）の一部が浅く窪む部分が確認でき、この部分が土坑の可能性も考えられるが明瞭

ではない。

赤焼土器の坏（第9図1～5）は大半が口径12～13cm、器高3.5～4cmのもので、底部は回転糸切り無調整のものである。高台埴（第9図6）は口縁部内面に面を持ち、高台端部がやや丸い形状を呈する。内面は黒色処理が施され、底部付近は放射状ヘラミガキが施されている。土師器甕（第9図7）は口縁部が短く、胴部の屈曲が弱い形状である。胴部外面には手持ちヘラケズリ、口縁部付近はナデ調整が施されている。内外面に使用痕と考えられる黒斑が複数認められる。

貝層5（遺構：第5・6図、遺物：第9図）

28トレンチ南西端、東西約1m、南北約1mの範囲で検出した。貝層は南東と南西側のトレンチ外に広がっていると考えられる。貝層中央部にサブトレンチを設定し部分的な断割りを行ったところ、トレンチ全体に堆積する黒褐色の砂層（6層）を挟んで2層の貝層を確認したことから上部貝層（5層）を貝層5-1、下部貝層（12層）を貝層5-2と呼称した。上部貝層は黒褐色の中粒砂、下部貝層が黒褐色の細粒砂を含む混土貝層である。含まれる貝類の多くは破碎されているが、マガキを主体としてアサリ、アツエゾボラ、イガイ、イボニシ、エゾチヂミボラ、エゾボラ、エゾボラモドキ、クロスジムシロガイ、シオフキガイ、シジミ、シロインコガイ、タマキビガイ、チョウセンハマグリ、ヒメムシロガイ、ヘソアキクボガイ、ホソウミニナ、ムラサキイガイなどが出土している。動物骨について、同定はできなかったが獣骨、魚類の破片が少量出土している。動物遺存体以外では、貝層5-1から底部外面に刻書がある土師器坏（第9図13）、鞆羽口（第9図15）が出土した。

貝層6（遺構：第5・6図）

29トレンチ南西側の拡張部、SL6炉跡に隣接して検出した。検出範囲は南北約0.6m、東西約1.2mで、さらに南西側のトレンチ外に延びている。同一面で検出したが、SL6炉跡とは切り合っていない。貝層は灰白色火山灰のブロックを含む黒褐色の砂層（2層）に覆われており、ほぼ水平に堆積している。貝層中央部にサブトレンチを設定し断ち割りを行ったところ、最大厚20cmの混土貝層であることが判明した。貝層を覆う2層中から出土した炭化材の放射性炭素年代測定で11～12世紀頃の年代値が得られている。貝類はマガキ、イガイを主体として、アカガイ、アサリ、エゾボラ、オキシジミガイ、クボガイ、シロインコガイ、ハマグリ、ヘビガイ、ベッコウソデガイ、ホソウミニナ、ムラサキイガイ、巻貝の蓋などが出土している。動物骨について、同定はできなかったが獣骨、鳥類、魚類の破片が少量出土している。

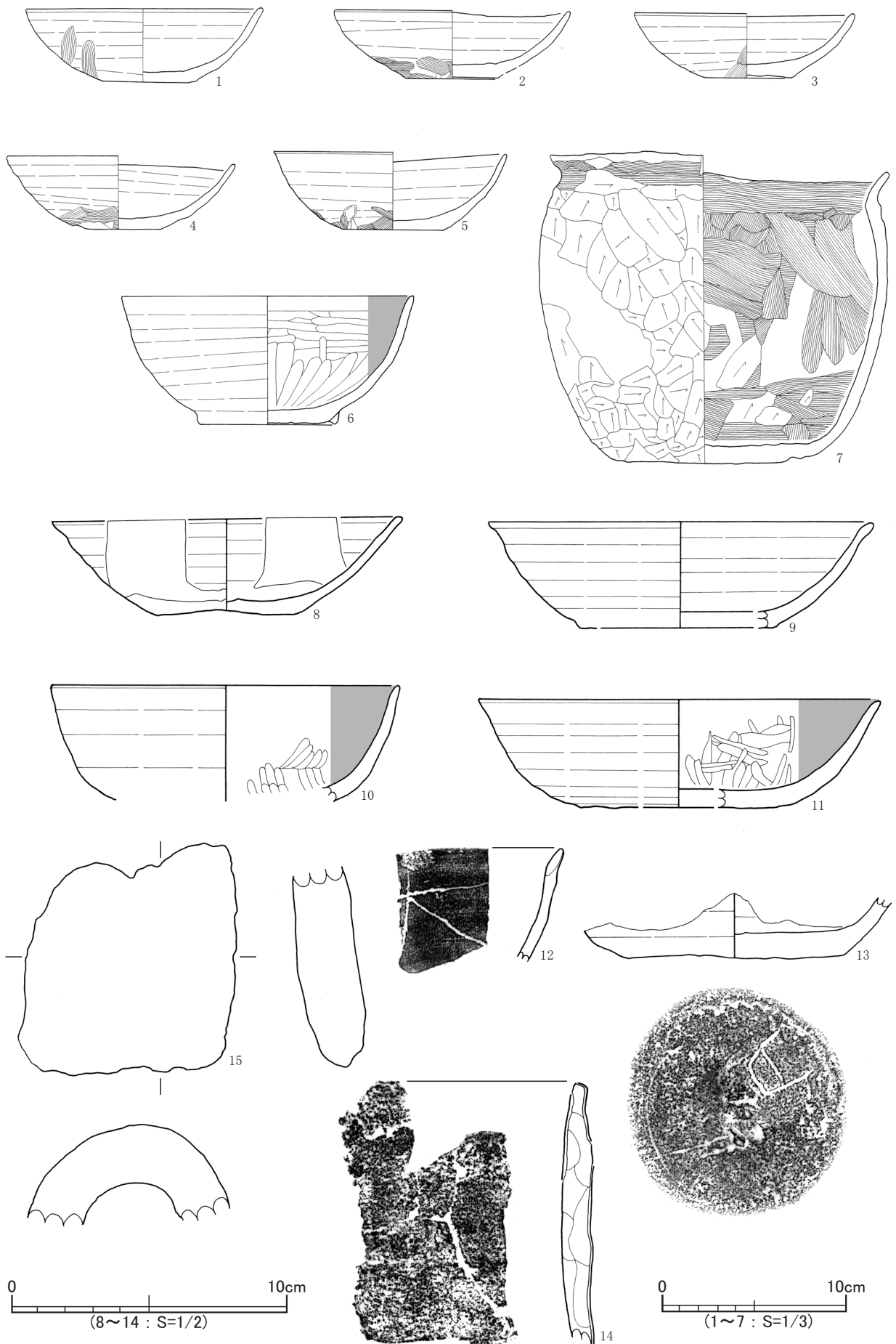
SX13遺物包含層（遺構：第5・7・8図）

30・31トレンチの地山（5層）直上で黒褐色の中粒砂内に破碎された貝殻や炭化物、被熱した凝灰岩、灰白色火山灰などを含む、最大厚は約30cmの遺物包含層を検出した。両層の含有物が共通していることから、同一の遺物包含層とした。遺物は地山境界付近から土師器坏や高台坏の破片が出土している。

SX9性格不明遺構（遺構：第5・6図）

28トレンチ北東側から黄褐色の粘土が不整形に広がる性格不明の遺構を検出した。黒褐色の砂層（6層）に覆われており、貝層5-1より古いと考えられる。不整形の粘土の広がりには2か所あり、南西側のトレンチ外に延びている。これらを同一の遺構としたが、異なる遺構の可能性も考えられる。

SX10遺物集中遺構（遺構：第5・7図）



第9図 表浜貝塚出土土器・土製品

| 番号 | 図版番号 | 器種 | トレンチ・遺構 層位 | 特徴 | 登録番号 | 写真図版 | 縮尺 |
|----|-------|------------|---------------------------|-------------------------------------------------------------------------------|-----------|---------|-----|
| 1 | 第9図1 | 土師器 坏 | 29トレンチ SX12土器集中遺構 (3層) | 赤焼土器 底面:回転糸切り→無調整 指ナデ痕 口径:12.9cm、 高さ:4.0cm、底径:4.7cm | 表浜29T-127 | 図版18-1 | 1/3 |
| 2 | 第9図2 | 土師器 坏 | 29トレンチ SX12土器集中遺構 (3層) | 赤焼土器 底面:回転糸切り→無調整 指ナデ痕 口径:12.8cm、 高さ:3.7cm、底径:5.0cm | 表浜29T-128 | 図版18-2 | 1/3 |
| 3 | 第9図3 | 土師器 坏 | 29トレンチ SX12土器集中遺構 (3層) | 赤焼土器 底面:回転糸切り→無調整 指ナデ痕 口径:12.0cm、 高さ:3.5cm、底径:4.8cm | 表浜29T-129 | 図版18-3 | 1/3 |
| 4 | 第9図4 | 土師器 坏 | 29トレンチ SX12土器集中遺構 (3層) | 赤焼土器 底面:回転糸切り→無調整 指ナデ痕 口径:12.4cm、 高さ:4.0cm、底径:4.0cm | 表浜29T-130 | 図版18-4 | 1/3 |
| 5 | 第9図5 | 土師器 坏 | 29トレンチ SX12土器集中遺構 (3層) | 赤焼土器 底面:回転糸切り→無調整 指ナデ痕 口径:12.8cm、 高さ:4.2cm、底径:5.5cm | 表浜29T-131 | 図版18-5 | 1/3 |
| 6 | 第9図6 | 土師器 高台塊 | 29トレンチ SX12土器集中遺構 (3層) | 外面:ロクロナデ 内面:黒色処理、ミガキ 底面:高台→ナデ 口径: 15.4cm、高さ:6.9cm、底径:7.4cm | 表浜29T-132 | 図版18-6 | 1/3 |
| 7 | 第9図7 | 土師器 甕 | 29トレンチ SX12土器集中遺構 (3層) | 外面:ヘラケズリ、ヘラナデ、ナデ、剥離 内面:ヘラケズリ、ヘラナデ、 ナデ 底面:ヘラナデ 口径:18.5cm、高さ:17.0cm、底径:8.3cm | 表浜29T-133 | 図版18-7 | 1/3 |
| 8 | 第9図8 | 土師器 坏 | 29トレンチ 3層 | 赤焼土器 底面:回転糸切り→無調整 口径:(12.9cm)、高さ:3.5 cm、底径:(5.2cm) | 表浜29T-134 | 図版18-8 | 1/2 |
| 9 | 第9図9 | 土師器 坏 | 29トレンチ 3層 | 赤焼土器 口径:(14.1cm)、高さ:3.9cm、底径:(7.2cm) | 表浜29T-135 | - | 1/2 |
| 10 | 第9図10 | 土師器 坏 | 29トレンチ 3層 | 外面:ロクロナデ、線刻 内面:黒色処理 | 表浜29T-136 | - | 1/2 |
| 11 | 第9図11 | 土師器 坏 | 29トレンチ 5層 | 外面:ロクロナデ 内面:黒色処理、ミガキ | 表浜29T-137 | - | 1/2 |
| 12 | 第9図12 | 土師器 坏 | 29トレンチ 6層 | 内面:黒色処理、ミガキ 底面:手持ちヘラケズリ 口径:(14.7cm)、 高さ:3.9cm、底径:(7.2cm) | 表浜29T-138 | 図版18-9 | 1/2 |
| 13 | 第9図13 | 土師器 坏 | 28トレンチ 貝層5-1 (5層) | 内外面:ロクロナデ 底面:ヘラ切り→ナデ、刻書 (焼成前・ヘラ書き) 高さ:(2.3cm)、底径:8.1cm | 表浜28T-1 | 図版18-10 | 1/2 |
| 14 | 第9図14 | 製塩土器 | 29トレンチ SL6炉跡 (2層) | 内外面:ナデ、剥離 海綿状骨針含有 | 表浜29T-139 | 図版18-11 | 1/2 |
| 15 | 第9図15 | 羽口 | 28トレンチ 貝層5-1 (5層) | 外面:ナデ | 表浜28T-2 | 図版18-12 | 1/2 |

第8表 表浜貝塚出土遺物観察表

29トレンチ S X12土器集中遺構の東側、0.4m×0.45mの範囲に焼土や貝類などが集中する範囲を遺構として認定した。検出面は S L 6 炉跡や貝層 6 と同一面の 2 層中である。焼土を主体として破碎された貝類、土師器や製塩土器の破片、炭化物、鉄滓を含んでいる。同定できた貝類はアサリ、イガイ、シジミ、ヒメエゾボラ、ヘソアキクボガイ、ヘンワゴマガイ、マガキ、レイシガイなどがある。

S X11火山灰集中遺構 (遺構: 第5・7図)

29トレンチ S X10遺物集中遺構の北側、0.25m×0.3mの範囲に灰白色火山灰のブロックが集中する範囲を遺構として認定した。検出面は 5 層中である。灰白色火山灰以外の少量の土師器片や破碎された貝類が出土した。

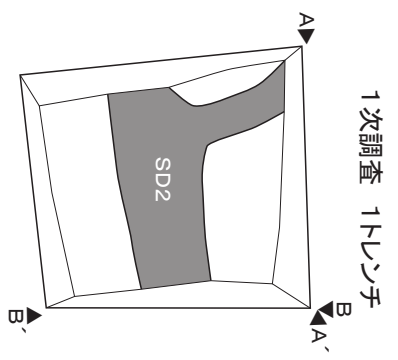
(5) 考察

A. 遺構の特徴と集落の様相

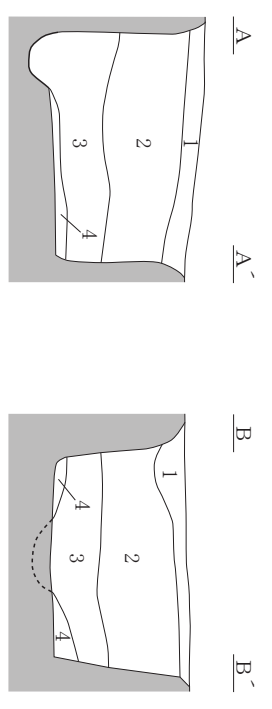
震災復興事業 (都市公園整備) に伴う調査 (5～8 次調査) では、炉跡 6 基、土坑 1 基、土器集中遺構 1 か所、貝層・遺物包含層 8 か所、溝跡 1 条、土器集中遺構などの遺構計 8 基を検出した。これらの遺構は遺構検出面の層位や遺構堆積土、出土遺物などから古墳時代後期～平安時代のものと推定される。また、これらの遺構は遺跡中央部から南側に集中しており、遺跡北側からの検出は少ない。

【炉跡】

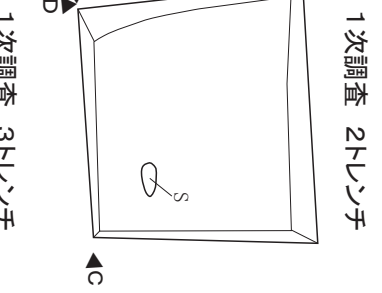
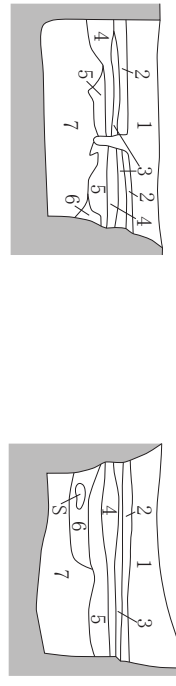
炉跡は遺跡中央部や南側を中心に計 6 基検出した。2・3 次調査においても計 5 基の炉跡を検出している (第10・11図)。炉跡は凝灰岩を伴うが、その多くが被熱により赤変しており、製塩などの作業で頻繁に使用されたと考えられる。炉跡に伴う遺物が少なく、時期を特定することは難しいが、その多くは平安時代に位置付けられると考えられる。2 トレンチで検出された S L 1・2 炉跡 (第 8 図) は南北方向に長軸を持ち、被熱した石組みを伴う炉跡である。S L 1 炉跡は長軸約 1.6m、最大幅約 0.9m、S L 2 炉跡は長軸約 1.3m、最大幅約 0.9m を測る。S L 2 の南側に浅いくぼみ (S X 2) を検出しており、S L 2 に伴う遺構の可能性がある。5～8 次調査で検出した炉跡は炉石が原位置から移動



1次調査 1トレンチ

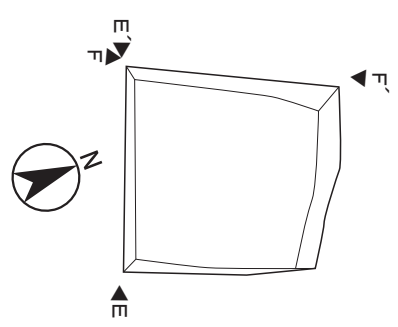


- 1層: 砂層 オリーブ黄色 5YR6/4
- 2層: 砂層 暗褐色 10YR3/3 遺物・炭化物・貝殻等を含む
- 3層: 砂層 黒褐色 10YR2/2 遺物・炭化物・貝殻等を含む
- 4層: 砂層 黄褐色 10YR5/6 遺物を含まない



1次調査 2トレンチ

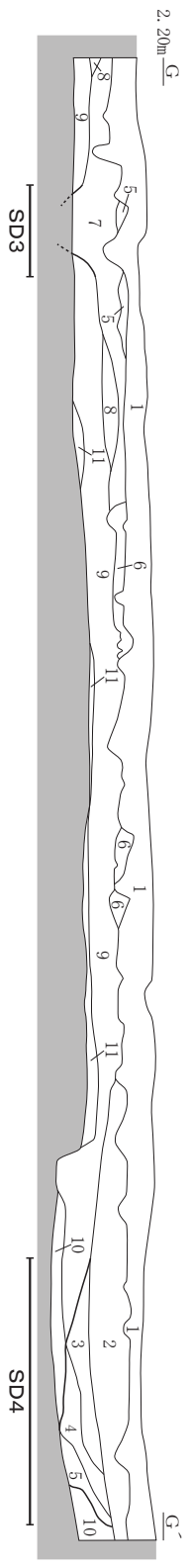
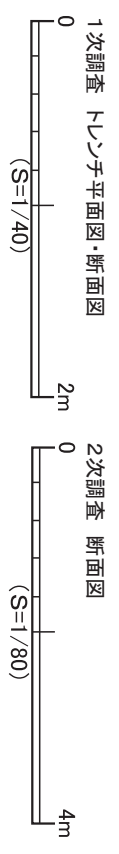
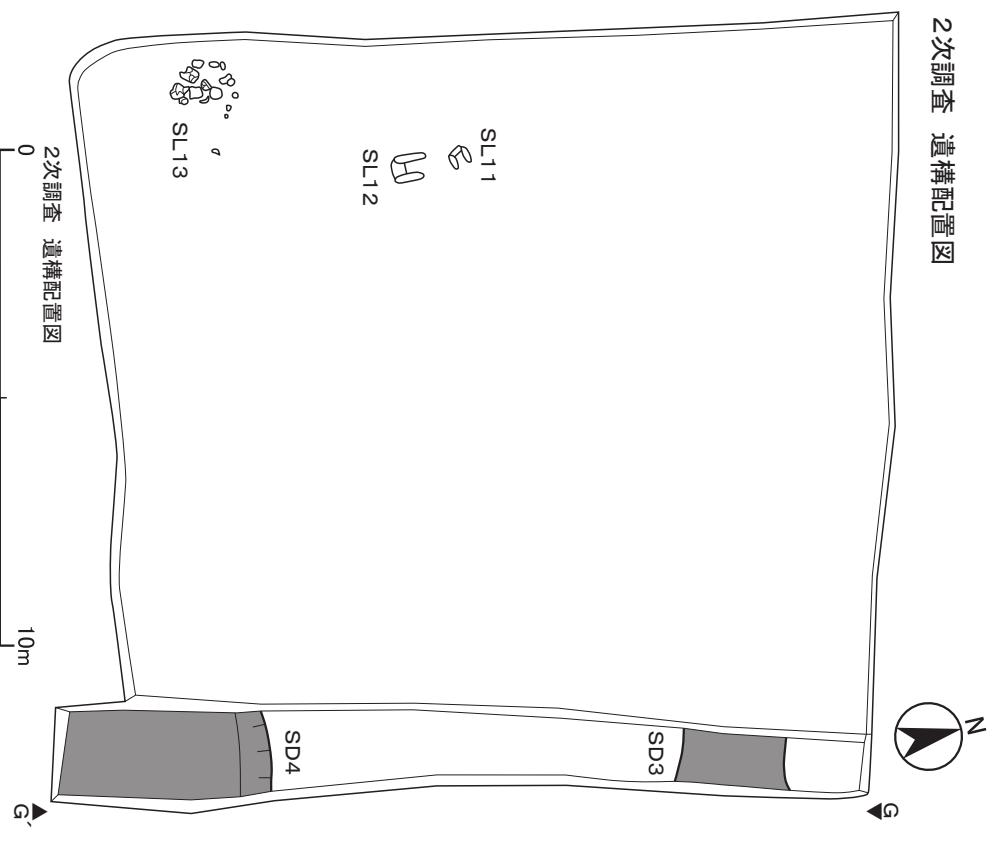
- 1層: 砂層 暗褐色 10YR3/3 盛土
 - 2層: 砂層 褐色 10YR4/4 遺物を少量含む
 - 3層: 砂層 黒褐色 10YR3/2 遺物を少量含む
 - 4層: 砂層 黒褐色 10YR3/2 遺物・炭化物を少量含む
 - 5層: 砂層 暗褐色 10YR3/3 遺物・炭化物を少量含む
 - 6層: 砂層 黒褐色 10YR2/2 遺物・貝殻を多量に含む、シルトを少量含む
 - 7層: 砂層 黒褐色 10YR3/2 炭化物を多量に含む、シルトを少量含む
- ※トレンチ底面に炭化物が一面に広がる



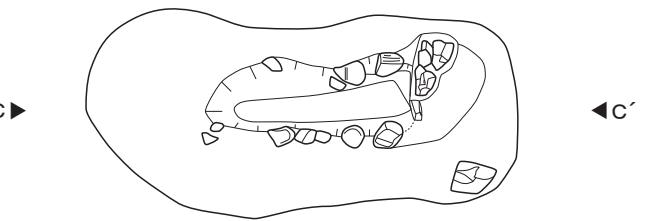
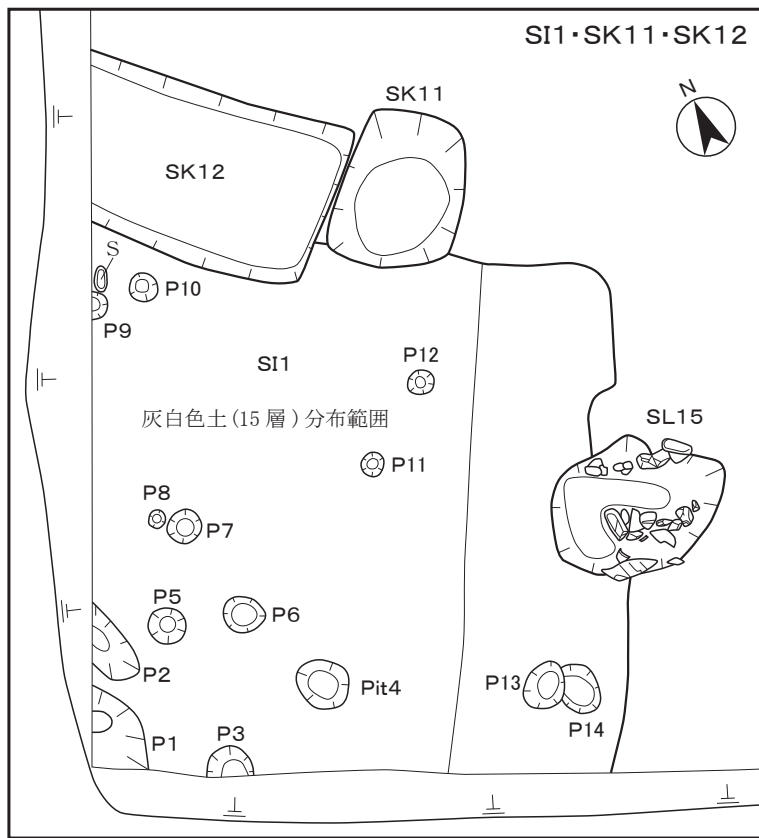
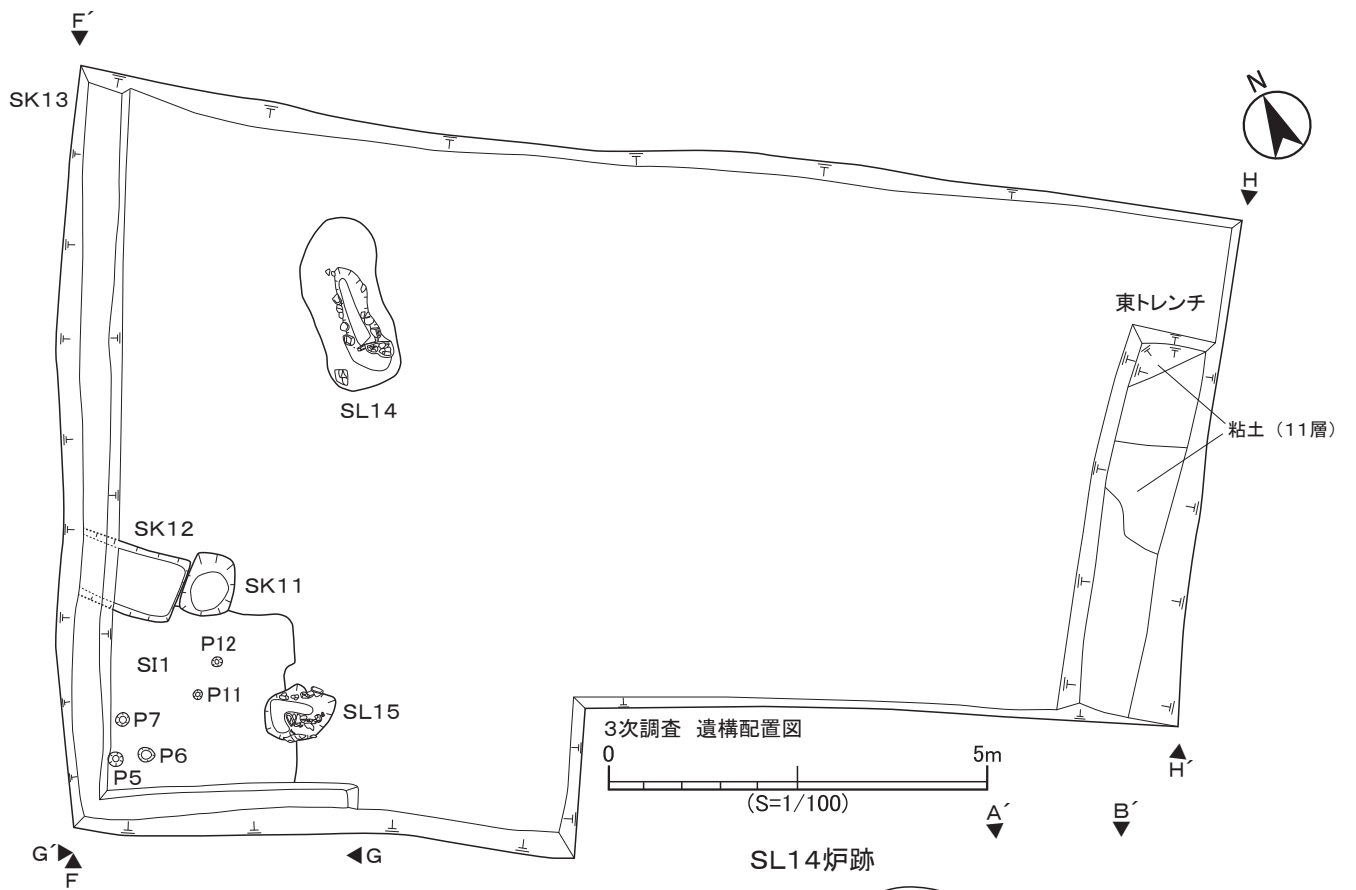
1次調査 3トレンチ

2次調査 調査区東壁

2次調査 遺構配置図

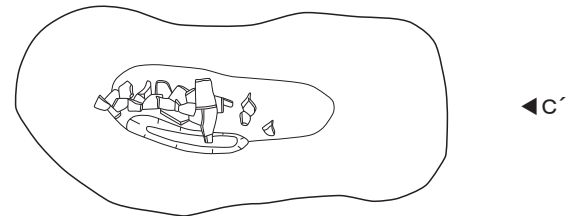


第10図 1・2次調査 遺構配置図・断面図

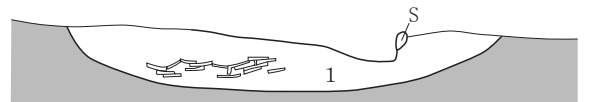
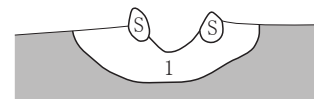
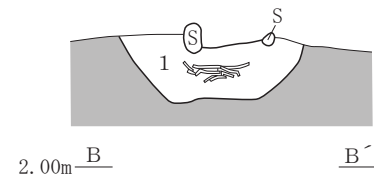


埋土: 明褐色 7.5YR5/6 砂質シルト 焼土と被熱した凝灰岩を多量に含む

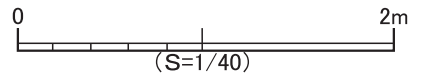
SL14炉跡掘方遺物出土状況



2.00m A A'



1層: 黒褐色 7.5YR2/1 砂質シルト 炉掘り方、土器片・ウニ棘を多量に含む



SL15炉跡

2.00m D D'

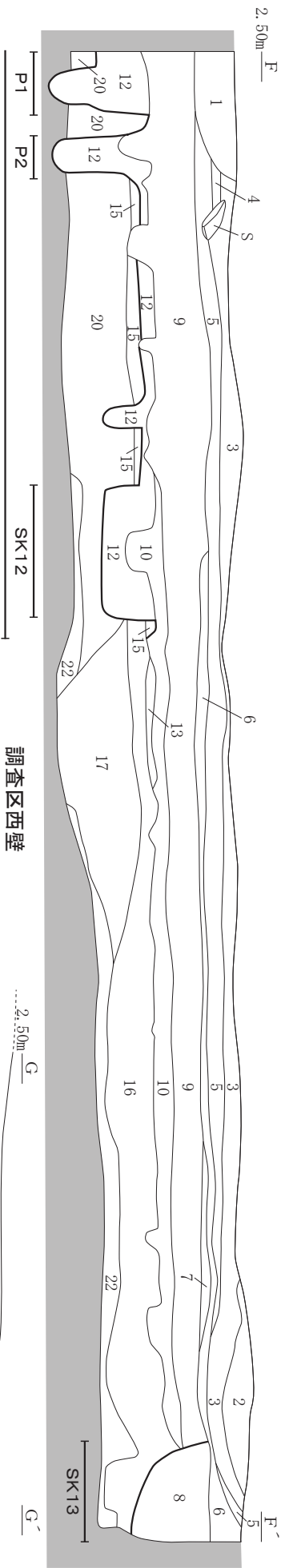
2.00m C C'



2.00m E E'

埋土: 暗褐色 7.5YR3/3 砂質シルト 黄褐色 (7.5YR8/7)の焼土を多く含み 貝殻・土器片・被熱した凝灰岩を含む

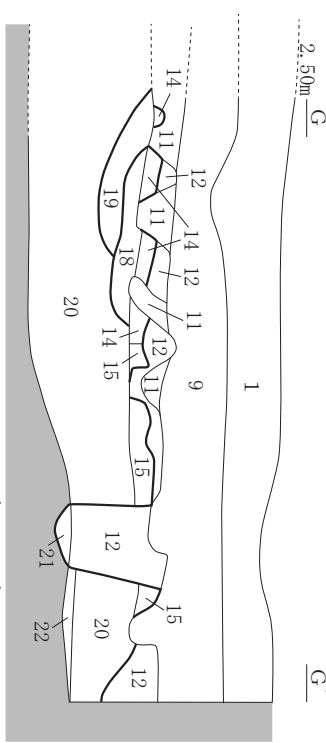
第11図 3次調査 遺構配置図・断面図



西壁・南壁土層観察表

| | | | |
|----------|--------|----------|--------------------------|
| 1層: 盛土 | 褐色 | 7.5YR4/4 | 盛土 |
| 2層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 炭化物・貝殻をわずかに含む |
| 3層: 砂層 | 黒褐色 | 7.5YR3/2 | 黒褐色土・貝殻をわずかに含む |
| 4層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 5層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR2/2 | 炭化物・貝殻を含む |
| 6層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 炭化物・貝殻をわずかに含む |
| 7層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/4 | SK13埋土 |
| 8層: 砂層 | 黒褐色 | 7.5YR3/2 | 炭化物・貝殻・土器片を多く含む |
| 9層: 砂層 | 黒褐色 | 7.5YR4/4 | 炭化物・貝殻・土器片を含む |
| 10層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR2/1 | 砂質シルト層、土器片・小礫等を含む |
| 11層: 砂層 | 褐色 | 10YR4/4 | 灰白色火山灰を多量に含む、土器片・貝殻を多く含む |
| 12層: 砂層 | 褐色 | 7.5YR4/4 | 灰白色火山灰を多量に含む、土器片・貝殻を多く含む |
| 13層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 14層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 15層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 16層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 17層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 18層: 砂層 | 暗褐色 | 7.5YR3/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 19層: 混土層 | 灰褐色 | 7.5YR4/2 | 貝殻・遺物を多く含む |
| 20層: 砂層 | 黒褐色 | 7.5YR3/2 | 炭化物・貝殻・土器片をわずかに含む |
| 21層: 粘土層 | 浅黄色 | 2.5YR7/4 | P3の底面に貼った粘土 |
| 22層: 砂層 | にぶい黄褐色 | 10YR6/4 | 貝殻をわずかに含む、湧水あり |

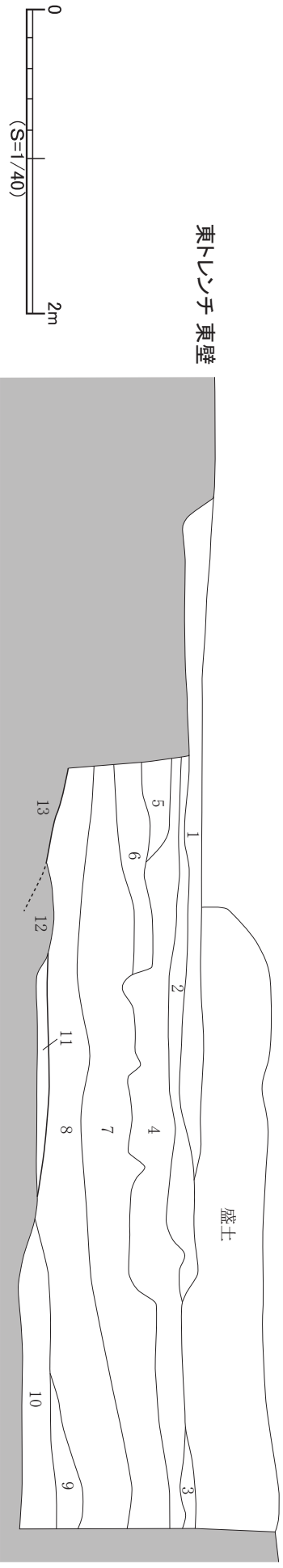
調査区西壁



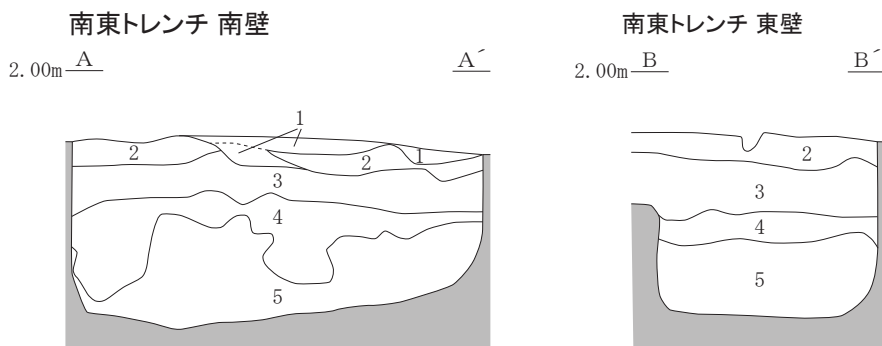
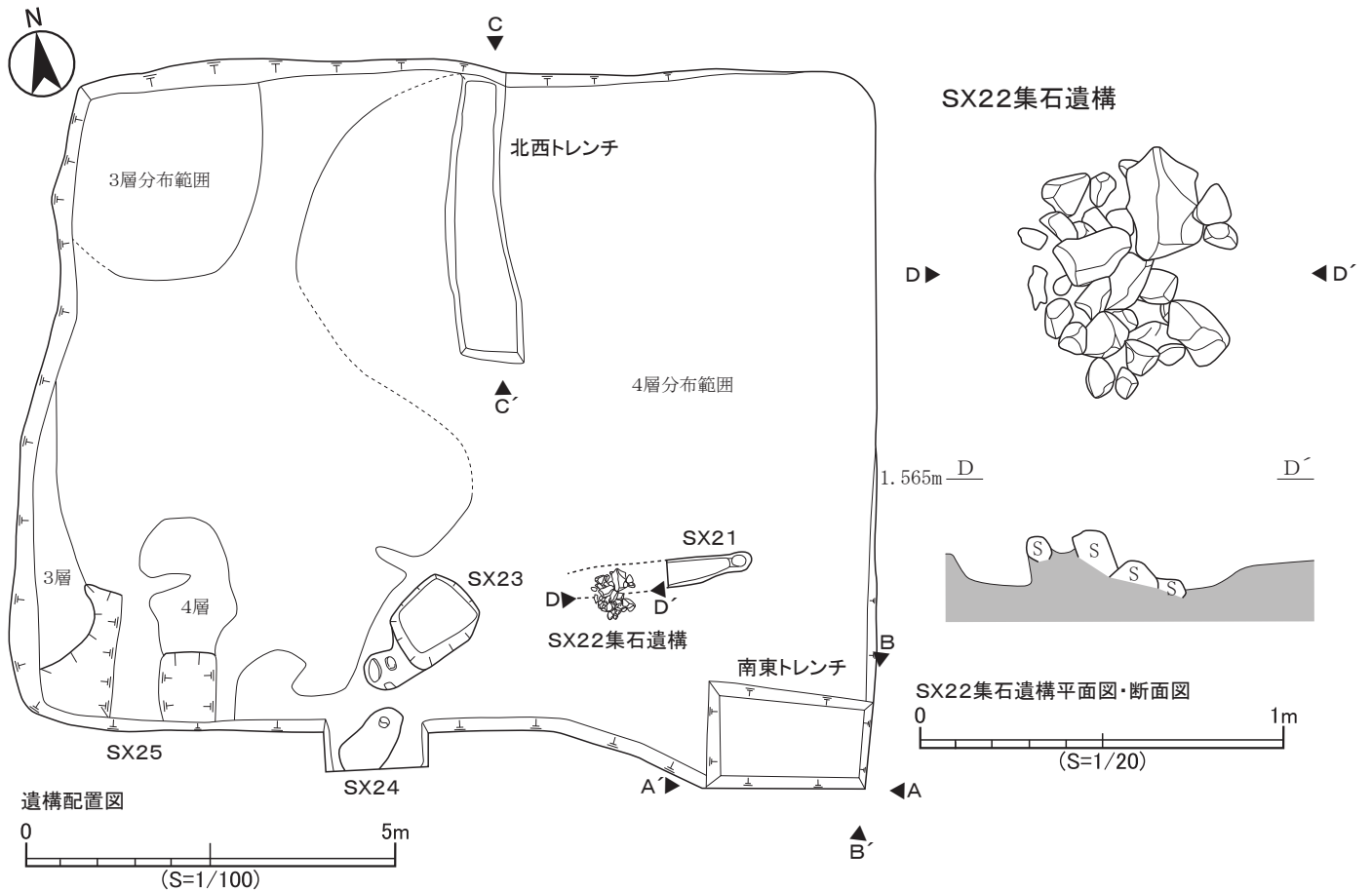
東トレンチ東壁土層観察表

| | | | |
|----------|--------|----------|-------------------------------|
| 1層: 砂層 | にぶい黄褐色 | 10YR4/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 2層: 砂層 | 黒褐色 | 7.5YR2/2 | 貝殻をわずかに含む |
| 3層: 砂層 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 貝殻・焼土をわずかに含む |
| 4層: 砂層 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 砂質シルト層、貝殻をわずかに含む |
| 5層: 砂層 | 黒褐色 | 7.5YR2/2 | 砂質シルト層、貝殻をわずかに含む、上面に灰白色火山灰を含む |
| 6層: 砂層 | にぶい黄褐色 | 10YR4/3 | 貝殻をわずかに含む |
| 7層: 砂層 | 黒褐色 | 10YR2/2 | 砂質シルト層、貝殻・土器片・小礫を多く含む |
| 8層: 砂層 | にぶい黄褐色 | 10YR4/3 | 貝殻・焼土を少量含む |
| 9層: 砂層 | 暗褐色 | 10YR3/3 | 貝殻・焼土を多く含む |
| 10層: 砂層 | 灰黄褐色 | 10YR4/2 | 貝殻を含む |
| 11層: 粘土層 | 淡黄色 | 5YR8/4 | 炭化物・焼土を含む、被熱した礫をフロック状に含む |
| 12層: 砂層 | 明黄褐色 | 10YR6/6 | 遺物を含まない |
| 13層: 粘土層 | 黄褐色 | 10YR5/6 | 砂を多く含む |

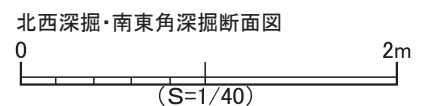
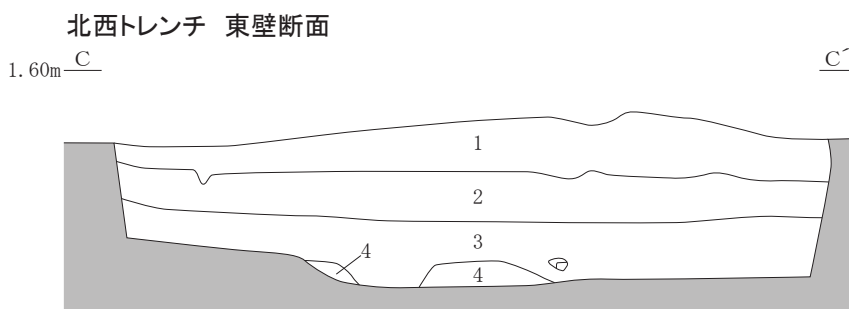
調査区南壁



第12図 3次調査 調査区断面図



- 1層: 盛土 表土 凝灰岩の小礫を含む
- 2層: 砂層 灰黄褐色 10YR4/2 旧表土
- 3層: 砂層 黒褐色 10YR3/2 遺物包含層
- 4層: 砂層 褐色 10YR4/4 遺物包含層
- 5層: 砂層 明黄褐色 10YR7/6



第13図 4次調査 遺構配置図・断面図

しているものが多い。人為的な解体、または災害や後世の攪乱を受けたためと考えられる。

【貝層・遺物包含層】

貝層は8トレンチを中心に計7か所、30・31トレンチで遺物包含層1か所確認した(第5図)。貝層は古墳時代後期～平安時代の複数時期の遺物が出土するものや動物遺存体以外の遺物がほとんど出

土しないものがあり、時期の特定が難しいものが多い。その一方で8トレンチ貝層2・3と貝層4のように堆積層の上下で検出され、時期差を把握できる貝層もあった。貝層2・4では関東系土師器の在地模倣品と考えられる坏や壺が出土しており、7世紀後半～8世紀の貝層と考えられる。また、貝層2・4から鹿角製の複合釣針（擬餌針）の未製品やシカ中手・中足骨製の骨鏃が出土しており、狩猟や漁撈などと関連がある遺物も出土している。また、遺跡北側の7・10トレンチでは、破碎された貝類や古代の遺物を含む砂層が遺構面や地山を覆う状況が確認された。検出された貝層の多くは複数の貝類を含むが、特にイガイとカキを主体とする貝層が多く、貝類の選択的な採取が行われていたことを示している。

【竪穴住居跡】

今回の調査では居住施設は確認されなかったが、3次調査で竪穴住居跡（S I 1）1棟を検出している（第11図）。S I 1 竪穴住居跡は3次調査区の南西角から南北約2.8m、東西約2.8mの範囲が検出された。住居北東角を検出したが、住居は西・南側の調査区外に延びている。北壁をS K 11・12土坑に切られている。住居内で検出されたピットのうちP 1～3はその深さから柱穴跡と考えられる（第12図）。P 3では砂質の地山に柱を安定して設置するため、底面に浅黄色（2.5Y7/4）の粘土（21層）を貼って礎盤としている。床面に灰白色火山灰を多量に含む褐灰色（7.5YR4/1）の砂層が堆積しており、柱穴はこれを掘削して構築している。このことから住居跡は灰白色火山灰（十和田a火山灰）降下（915年頃）以降に構築されたと考えられる。しかし、S I 1 竪穴住居跡やS L 15炉跡からは9世紀中葉の遺物も出土しており、より詳細な検討が必要である。

【土器集中遺構】

S X 12土器集中遺構は29トレンチ中央部の北西壁付近、東西約0.7m、南北約0.8mの範囲から酸化炎焼成の内外無調整の土器（赤焼土器）の坏5点、高台碗1点、非ロクロ成形の土師器甕1点、楕円形の扁平な礫や球形の礫がまとまって出土した。土坑に一括廃棄した状態と考えられるが、遺構のプランは確認できなかった。出土した土器のうち、赤焼土器については底部回転糸切り無調整で、口径12～13cm、器高3.5～4cm、底径4.5～5.5cmのもので、底径：口径比は平均0.38である。今回出土した赤焼土器については、その法量、口径10cm程度の小型の坏類が伴っていない点からすると高橋透氏の分類（高橋2018）のE 2群（10世紀後半）に相当すると考えられる。高台碗については、山王遺跡千刈田地区S X 543（S K 543）（多賀城市教育委員会1991・高橋分類E 1群（10世紀前半））では同様の形態が見られないこと、一段階新しいと考えられる多賀城跡鴻ノ池地区S B 3181-N 1 W 2出土資料（宮城県多賀城跡調査研究所2014）から本資料と類似する碗が出土していることから、E 2群に位置付けられると考えられる。土師器甕は高橋分類のE 1群・2群では明確な型式差が認められないが、一括廃棄による資料とするとE 2群に位置付けられる可能性が高い。以上のことからS X 12土器集中遺構は高橋分類のE 2群相当の10世紀後半に位置付けられると考えられる。

【その他の遺構】

1～8次調査において4条の溝跡を検出している。検出している範囲が狭いことから規模や用途は不明であるが、2トレンチのS D 1溝跡は他の溝跡に比べて小規模であることから、S L 1・2炉跡やS K 1土坑に関連する排水溝のような設備であると考えられる。また、硬く締まった硬化面や黄褐色の粘土が不整形に広がる性格不明の遺構（S X 5・9）、焼土や貝類、灰白色火山灰などが集中する遺構（S X 1・7・8・10・11）などを検出しているが、時期を特定できるものは少ない。

【集落の様相】

これまでに行われた調査はトレンチによる限定的な調査であるため、確認された遺構や遺物は遺跡全体のごく一部分に限られている（第4～8・10・11・13図）。出土遺物は複数時期の遺物が混在する堆積土中から出土したものが多いが、7世紀後半～11世紀中葉頃と考えられる土師器や須恵器、赤

焼土器、製塩土器、骨角製品、鉄製品、動物遺存体などが出土している。土器類では関東系土師器坏やこれを模倣した土師器坏、「宮木」の刻書土器、靱圧痕を持つ土器片、骨鏃や鉄製品では開窩式離頭銛や複合釣針（擬餌針）、骨鏃、卜骨、鉄鏃、刀子などが出土し、表浜貝塚を特徴付ける遺物が複数確認されている。製塩土器では在地の厚手で円筒形の製塩土器に加え、三河湾沿岸地域系統の特徴を有する製塩土器が1点出土している（第14図1）。同様のものは長須賀遺跡においても出土しており（第14図2）、三河湾沿岸地域由来の製塩土器が七ヶ浜半島内で面的な広がりを持っていることが分かった。また、S I 1 堅穴住居跡が灰白色火山灰降下以降の住居とすれば、表浜貝塚が10世紀後半段階に居住域を持つ集落として機能していた可能性が高い。さらに2次調査でS L 13炉跡などから口径9～10cm前後、器高1.5～2cm前後の高台皿が複数出土している（第10図・写真図版5-②）。これらは高橋分類（高橋2018）のF群に相当する10世紀末から11世紀中葉頃に位置付けられると考えられ、11世紀以降も集落として機能していた可能性も高いと言える。

これまでの調査により不明であった奈良時代以前や10世紀代の七ヶ浜半島における人々の動向の一端が明らかになったことは大きな成果である。また、当集落の墓域と考えられる高山横穴墓群の調査成果（七ヶ浜町教育委員会2016）、延喜式内社鼻節神社や「国府厨印」の存在などを総合すると、製塩や漁撈・加工作業など生産活動の拠点として、長期にわたって営まれた集落であると同時に、陸奥国府多賀城や関東・東海地方と深い繋がりを持っていたことを示しており、当集落が古代の七ヶ浜半島南部における中核的な集落であることが明らかになった。

B. 松島湾周辺の古代製塩の様相

宮城県では古墳時代を除く、製塩土器が出土または採取される、縄文～平安時代の遺跡が180か所確認されており（小井川・加藤1988）、縄文時代晩期と平安時代（9世紀代）のものが主体である。これまで県内では古墳時代の明確な製塩遺跡は確認されておらず、縄文時代から続く塩生産に現状では断絶期が生じている。東北地方の古代製塩に関する遺跡や遺構、製塩土器に関する集成はこれまでに加藤道男や高橋透によって行われている（加藤1989・高橋2013）。加藤は仙台湾周辺の縄文～平安時代の製塩遺跡、製塩土器の集成と考察を行い、高橋は太平洋沿岸の奈良・平安時代の製塩遺跡の集成や製塩遺構、製塩土器の考察を行っている。



第14図 他地域の特徴を有する製塩土器片

松島湾沿岸は古代の製塩遺跡の密集地域であるが、その分布状況から①宮戸島・浦戸諸島遺跡群（里浜貝塚、江ノ浜貝塚など）、②松島湾奥部遺跡群（西の浜貝塚、館ヶ崎遺跡、瑞巖寺境内遺跡など）、③塩釜港北部遺跡群（新浜B遺跡など）、④七ヶ浜半島北部遺跡群（水浜遺跡など）、⑤七ヶ浜半島南部遺跡群（表浜貝塚、長須賀遺跡など）の5つの遺跡群に分類できる（菅原2020）。松島湾内では9世紀以降に七ヶ浜町水浜遺跡や松島町瑞巖寺境内遺跡など検出事例が増加するが、奈良時代に属するものは少ない。奈良時代の遺構としては塩竈市新浜B遺跡の1・2号炉（8世紀後半）が最も古く、最古の製塩土器出土例は東松島市亀岡遺跡のS I 01住居跡から出土した8世紀中葉頃のものである。製塩炉の平面形は長楕円形、楕円形、円形、長方形があり、炉壁面に凝灰岩を並べるものや浅い掘り込みを持つもの、炉底面が石敷きのものなど複数のタイプが存在する。9世紀以降は遺構検出数に比例して製塩土器の出土量も増加し、多賀城市山王遺跡や市川橋遺跡など10世紀代まで確認できる。松

島湾周辺では8世紀代にすでに湾内に遺跡が点在しており、8世紀末から9世紀初頭以降に遺跡数が急増し、10世紀代まで継続している。

近年、東松島市江ノ浜貝塚や女川町崎山遺跡などから古代の製塩について新たな成果が得られている。江ノ浜貝塚では入江に面する標高約2mの微高地から9世紀代の製塩炉が5基検出されている(菅原2019)。特筆すべきは①凝灰岩を用いた石組み炉と漆喰状の炉が存在し、石組み炉から漆喰状の炉へと変遷する可能性があること、②厚手大型と薄手小型の製塩土器が異なる地点から出土し、作業場所(炉)ごとに使い分けられていた可能性があること、③炉や周辺の堆積土中から多数の被熱した微小生物遺存体(ウズマキゴカイ)が検出され、製塩過程で「藻灰」が利用されていた可能性があることである。製塩土器の使い分けや藻灰の利用は、不明な点が多い塩の生産工程を解明する大きな成果である。また、石帯やト骨が出土しており、松島湾周辺の塩生産が陸奥国府多賀城や関連施設の管理下で行われていた可能性も示している。崎山遺跡では竪穴住居跡から県内最古の製塩土器(8世紀前半)が出土した。これまで北上川下流域や牡鹿半島では8世紀末～9世紀初頭以降に塩生産が活発化する(高橋2013)とされていたが、8世紀代には松島湾周辺と同様に開始されており、両地域が連動していることが明らかになった。平成24・25年度の表浜貝塚と長須賀遺跡の調査において、三河湾沿岸地域で出土する棒状脚を持つ製塩土器片(第14図1・2)が出土した。これらはその特徴から8世紀代の知多式4A1類または2類(立松2010など)に相当すると考えられる。現状、宮城県内において他地域の製塩土器出土例が乏しいことから三河湾沿岸部の資料と比較・検討がさらに必要であるが、8世紀代に松島湾の塩生産において、他地域の技術が導入されていた可能性がある。また、古墳時代の断絶期以後の塩生産の復活にあたり、他地域の技術が導入されたという仮説も成り立ち、検討する必要があるだろう。

宮城県内の古代の製塩について、新たな資料や知見が出てきたことにより、塩の生産工程や製塩技術の系譜、国府や城柵と製塩遺跡との関係性、塩の流過程など、より多角的な視点での検討と議論が必要となっている。

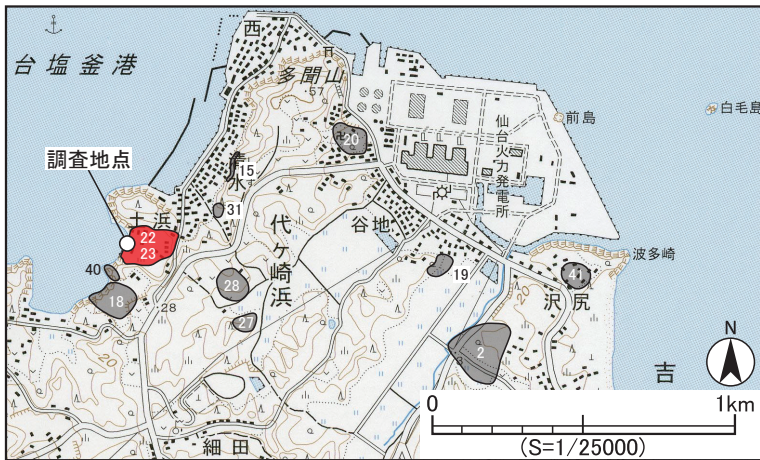
(6) まとめ

5～8次調査の成果を受け、都市公園整備では町道天神堂線に囲まれた遺跡中心部は散策路と植栽による整備とし、駐車場や公衆トイレ、広場などの便益施設は遺構の分布密度が低い遺跡北側と西側に整備することとなった(巻頭写真3)。さらに炉跡や土器集中遺構などを検出した29トレンチ周辺は厚さ2m以下の盛土と緑化で遺構の保護措置を講じた。また、令和元年度には調査成果と遺跡周知のため、公園内に表浜貝塚と高山横穴墓群の解説板を各1基設置した。

第2節 土浜A・B貝塚 (第15・16図、写真図版6・7)

(1) 遺跡の概要

土浜A・B貝塚は七ヶ浜町代ヶ崎浜字土浜地内に所在する縄文時代晩期及び平安時代の貝塚・生産遺跡である(第15図)。遺跡は塩釜港に開く入江状の浜辺から標高約20mの丘陵裾部にかけて立地し、現況は宅地と畑地である。これまで詳細な調査は行われてないが、周辺から縄文時代晩期の土器や土師器、須恵器などが採取されており、カキを主体とする貝層が確認されている。かつて浜辺ではカキ殻を原料として生石灰を製造するための貝殻焼き用のカマドがあったとされ(村主1928)、周辺で確認されるカキを主体とする貝層の一部はこうした近現代に生石灰用に集められたものである可能性が高い。遺跡南側の丘陵を越えると平安時代の竪穴住居跡や製塩遺構などが検出され、縄文時代晩期や弥生時代中期、平安時代の遺物が出土した水浜遺跡が所在している(七ヶ浜町教育委員会1993)。



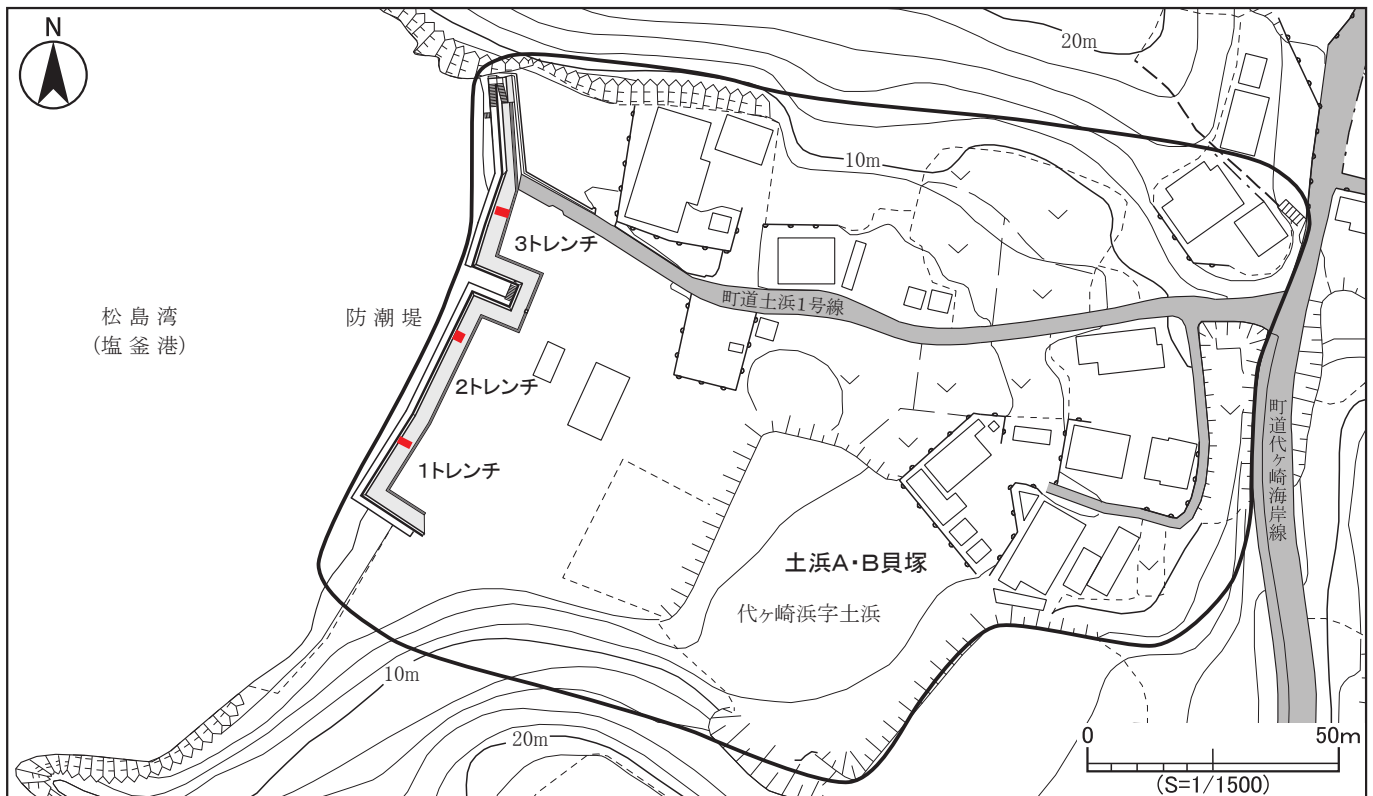
第15図 土浜A・B貝塚の位置と周辺の遺跡

土浜A・B貝塚

| 所在地 | | 時代 | |
|----------------|--------|--------------------------|------------|
| 七ヶ浜町代ヶ崎浜字土浜 | | 縄文晩期・平安 | |
| 遺跡番号 | 過去の調査歴 | 種別 | 立地 |
| 20022 20023 | なし | 貝塚 生産遺跡 | 丘陵斜面 低地 |
| 検出遺構等 | | 遺物包含層 | |
| 出土品 | | 縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器ほか | |

周辺の遺跡

- 2：二月田貝塚（縄文・弥生・古代）
- 15：清水洞窟貝塚（弥生・古墳・古代）
- 18：水浜遺跡（縄文・弥生・古代）
- 19：神明遺跡（古代） 20：影田貝塚（古代）
- 27：沢上貝塚（縄文） 28：峯貝塚（縄文・古代）
- 31：清水貝塚（縄文・弥生・古墳・古代）
- 40：水浜横穴墓（古代）
- 41：沢尻貝塚（縄文・弥生・古代）



第16図 トレンチ配置図

(2) 調査要項

- 遺跡名 土浜A・B貝塚（宮城県遺跡地名表登録番号 20022・20023）
- 調査地 七ヶ浜町代ヶ崎浜字土浜地内
- 調査原因 防潮堤改修
- 調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）
- 調査期間 平成28（2016）年11月29日～12月7日
- 対象面積（事業面積） 812.35㎡ 調査面積 19.2㎡

(3) 調査の概要と成果

平成28年度に宮城県仙台塩釜港湾事務所より代々崎浜土浜地区の防潮堤を改修する計画が示された。既存防潮堤とほぼ同位置に同型の防潮堤を整備する計画であるが、堤防基部の幅が既存より大きく、陸側で新たな掘削を伴うものであったことから、遺構・遺物の有無を確認するために確認調査を実施した。既存防潮堤の陸側にトレンチ3本(1～3トレンチ)を設定し、重機を使用して掘削を行った(第16図)。掘削後に写真撮影、土層堆積状況の観察・記録を行った後に、重機で埋め戻しを行った。

1トレンチ

1トレンチ(2m×3.3m)は既存防潮堤の南東側に設定した。3本のトレンチでは最も南側に位置する。掘削途中でトレンチ床面からの著しい湧水を確認したため、表土下約1.1mで掘削を止めた。表土下は攪乱を受けており、既存防潮堤の基礎設置の際に掘削された可能性が高い。

2トレンチ

2トレンチ(2.3m×2.3m)は既存防潮堤の中央部に設定した。1トレンチ同様に掘削途中で著しい湧水を確認したため、表土下約1.1mで掘削を止めた。トレンチ南東壁から切石列を検出した(写真図版6-⑦・⑧)。切石には溝状の加工痕を残すものがあった。切石の下には柱材と考えられる木材と近現代のごみを含む土層、破碎されたカキを主体とする貝層を確認した(写真図版7-①)。貝層は焼土や被熱した凝灰岩の他、現代の瓶などを含んでいることから近現代のものと考えられる。

3トレンチ

3トレンチ(2m×3.1m)は防潮堤北東側に設定した。トレンチ北東壁・北西壁の表土直下からコンクリートを検出した。北東壁のコンクリートは3層あり、厚さは上層から10cm、30cm、8cmである。北西壁は2層あり、厚さは上層から15cm、6cmである。コンクリートの下からはカキを主体とする貝層を検出したが(写真図版7-⑥)、現代の瓶などを含んでいることから2トレンチ同様に近現代のものと考えられる。

(4) まとめ

計画地に隣接する浜辺で大洞B式の破片を1点採取したが、1～3トレンチでは土浜貝塚に関する遺構や遺物は確認されなかった。浜辺付近は既存の防潮堤により削平や攪乱を受けていることが判明した。以上のことから、計画地は遺跡との関わりがないと考えられ、当初の計画通りに実施して問題がないと判断した。尚、過去の航空写真(1952年・国土地理院)では今回の調査地点付近に建つ2棟の建物が確認できる。2・3トレンチで検出された切石列やコンクリートは、この建物の基礎や貝殻焼き用カマド(村主1928)に関するものと考えられる。

第3節 阿川沼貝塚 (第17・18図、写真図版8・9)

(1) 遺跡の概要

阿川沼貝塚は七ヶ浜町菖蒲田浜字小塚・新小塚地内に所在する縄文時代晩期・弥生時代中期の貝塚・製塩遺跡である(第17図)。阿川沼西側の丘陵及び低地に立地し、現況は水田と畑地である。丹治栄一氏が発見し、紹介している小塚貝塚(丹治1969)はこの阿川沼貝塚と同一と考えられる。平成26年度には農山漁村地域復興基盤総合整備事業による暗渠排水管理設、排水溝改修、水田区画整理工事に伴い、阿川沼西側の水田において確認調査を実施したが、遺構・遺物は確認されなかった(七ヶ浜町教育委員会2016)。

(2) 調査要項

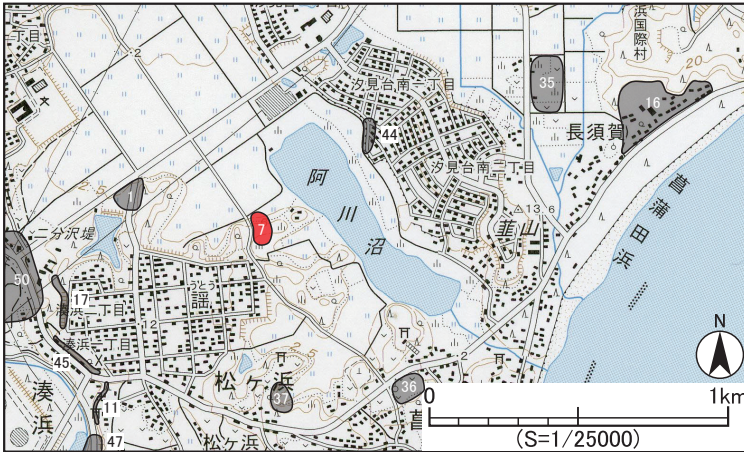
遺跡名 あがわぬまかいづか 阿川沼貝塚(宮城県遺跡地名表登録番号 20007)

阿川沼貝塚

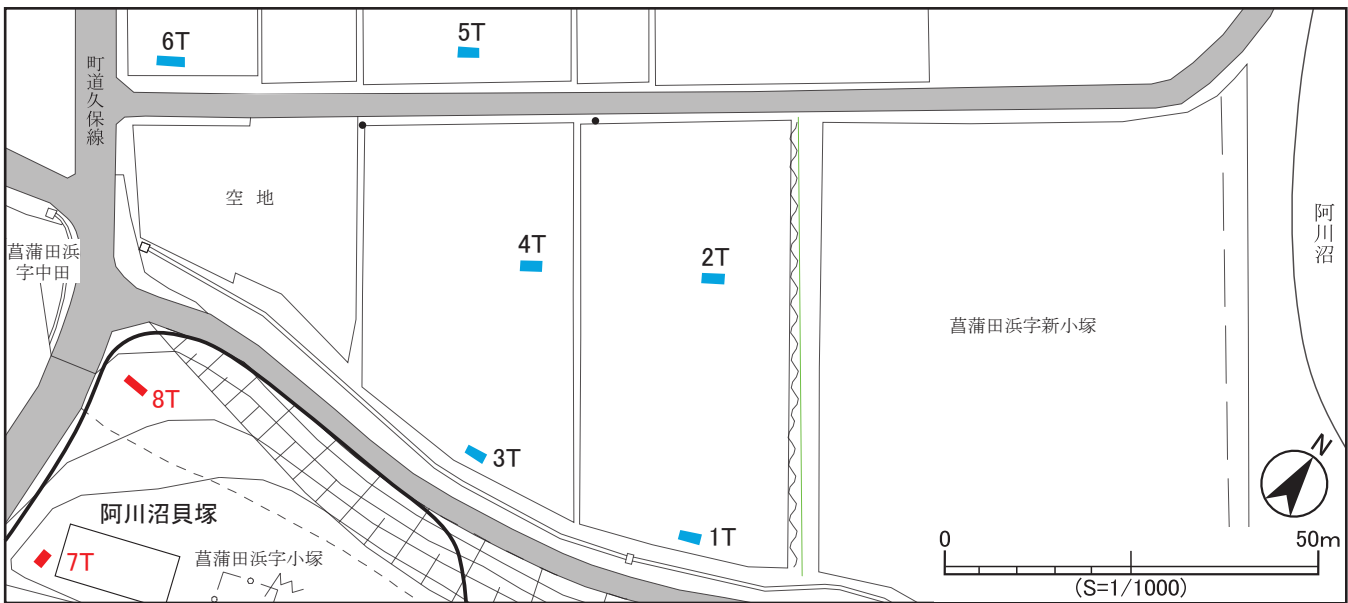
| 所在地 | | 時代 | |
|---------------|---------------------|------------|-------|
| 七ヶ浜町菖蒲田浜字小塚ほか | | 縄文晩期・弥生 | |
| 遺跡番号 | 過去の調査歴 | 種別 | 立地 |
| 20007 | 2014年 | 貝塚 生産遺跡 | 丘陵・低地 |
| 検出遺構等 | 遺物包含層 | | |
| 出土品 | 縄文土器・弥生土器・製塩土器・土偶ほか | | |

周辺の遺跡

- 1：林崎貝塚（縄文・弥生）
- 11：薬師堂横穴墓群（古墳後期～平安）
- 16：長須賀遺跡（古墳後期～平安）
- 17：榊形囲横穴墓群（古代）
- 35：東原遺跡（古代） 36：諏訪神社前遺跡（縄文）
- 37：笹山貝塚（縄文・弥生） 44：鬼ノ神山横穴墓群（古代）
- 45：砂山横穴墓群（奈良・平安）
- 47：弁天A遺跡（縄文） 50：新田前遺跡（古代）



第17図 阿川沼貝塚の位置と周辺の遺跡



■：平成26年度（1次調査） ■：平成28年度（2次調査）

第18図 トレンチ配置図

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | 特徴 |
|-----|----|-------|-------------|-----------------------------------------|
| 1 | 土層 | 砂質シルト | 暗褐色 10YR3/4 | |
| 2 | 土層 | 砂質シルト | オリーブ色 5Y5/6 | 再堆積層、3層との境界でビニール袋が挟まる |
| 3 | 土層 | 粘質シルト | 暗褐色 10YR3/4 | 旧表土 |
| 4 | 土層 | 粘質シルト | 褐色 10YR4/4 | 炭化物を含む、下層では5層の粘質シルトが混じる部分がある |
| 5 | 砂層 | | オリーブ色 5Y5/6 | 地山、砂層と粘質シルトの互層、硬化した砂を主体とし、4層に近い粒径が大きくなる |

第9表 阿川沼貝塚 7トレンチ土層観察表

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | 特徴 |
|-----|----|-----|-------------|---------------------------------------|
| 1 | 土層 | シルト | 黒褐色 10YR2/3 | 表土、脆くさらさらとした土質、現代のゴミを大量に含む |
| 2 | 土層 | シルト | 褐色 10YR4/4 | 径十数cm程の礫、褐色（7.5YR4/6）の土粒を含む（面積割合1~2%） |

第10表 阿川沼貝塚 8トレンチ土層観察表

調査地 七ヶ浜町菖蒲田浜字小塚地内
 調査原因 通学路（歩道）整備
 調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）
 調査期間 平成29（2017）年2月14日
 対象面積（事業面積） 4,053㎡ 調査面積 6.3㎡

(3) 調査の概要と成果

平成28年度に町建設課より町道久保線沿いに幅員2.5mの歩道を整備する通学路（歩道）整備計画が示され、遺跡範囲の一部が法面掘削を行う場所にあたることが判明した。これを受けて遺構・遺物の有無を確認するために確認調査を実施した。掘削箇所にトレンチ2本（7・8トレンチ）を設定し（第18図）、重機を使用して掘削を行った。尚、トレンチ番号は今回の調査地点が平成26年度の調査地点に隣接することから、前回のトレンチ番号と連続するように付した。掘削後に写真撮影、土層堆積状況の観察・記録を行った後に重機で埋め戻しを行った。

7トレンチ

7トレンチ（1.5×3m）は丘陵平坦面に設定し、重機で約65cm掘削した（写真図版8-⑤～⑦）。トレンチ東側は農業用ハウスが隣接している。堆積層は5層確認し（第9表）、表土下約35cmでオリブ色（5Y5/6）の地山（5層）を検出した。地山は砂と粘質シルトの互層で構成され、上層ほど粒径が大きい。表土下から地山までの間には3層の堆積土を確認したが、表土直下の2層は地山（5層）の再堆積層である。2層と3層の間にはビニール袋が含まれていた。遺構・遺物は確認されなかった。

8トレンチ

8トレンチ（1×3m）は7トレンチ北西側の丘陵緩斜面に設定し、重機で約65cm掘削した（写真図版9-①・②）。堆積層は2層確認し（第10表）、表土下約20cmで褐色（10YR4/4）の地山（2層）を検出した（写真図版9-④）。表土には大量のごみを含んでいる。遺構・遺物は確認されなかった。

(4) まとめ

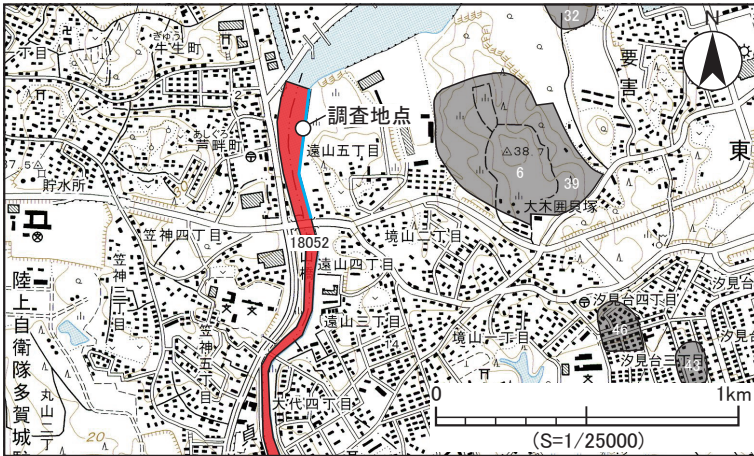
今回の調査では、阿川沼貝塚に関する遺構・遺物は検出されなかった。表土直下の状況から後世の造成により地形が大きく改変されていることが判明した。今回の計画地は遺跡との関わりが低いと考えられるため、当初の計画通りに実施して問題がないと判断した。

第4節 貞山堀（第19・20図、写真図版10・11）

(1) 遺跡の概要

貞山堀は開削年代が異なる「御舟入堀」、「新堀」、「木曳堀」の3つの運河の総称である。最初に開削されたのは阿武隈川河口と名取川河口の閑上を結ぶ運河の「木曳堀」で、慶長2～6（1597～1601）年頃に開削された。続いて、塩竈市牛生から仙台市宮城野区蒲生を結ぶ「御舟入堀」が万治元年～寛文13・延宝元年（1658～1673年）に開削された（第19図）。最初に仙台藩士の佐々木只大夫により牛生から多賀城市大代間が開削され、その後大代から蒲生までの開削工事に着手したが困難を極めたとされる。御舟入堀が完成した寛文13年の年代は、この工事を担当した和田房長が鹽竈神社に奉納したとされる石灯籠の願文に基づくものである。藩政時代はこの2つの運河が仙台藩の水運を担っていたが、全水路が開通するのは明治5（1872）年に名取川と七北田川までを結ぶ「新堀」が開削されてからである。「貞山堀」の名称は、明治14（1881）年に当時の宮城県土木課長の早川智寛によって命名されたもので、明治期の大改修工事開始直後のことである。その後、明治22（1889）年に告示された「運河取締規則」によって、御舟入堀、新堀、木曳堀に加え、石巻市石井閘門から東松島市東名までの北上運河と東名運河を含めた「貞山運河」の名称に改称された。

これまで貞山堀に関する調査事例は少ないが、近年仙台市宮城野区蒲生地区において測量調査や発掘調査が行われている。平成20年度には、昭和10（1935）年に施工された蒲生北閘門前面の石積護岸の測量調査が行われ（仙台市教育委員会2010）、平成27・28年度には被災市街地復興土地区画整理事業に伴う調査で舟溜り跡の護岸や蒲生御蔵を囲む溝跡が検出されている（仙台市教育委員会2018）。



第19図 貞山堀の位置と周辺の遺跡 — : 整備計画範囲

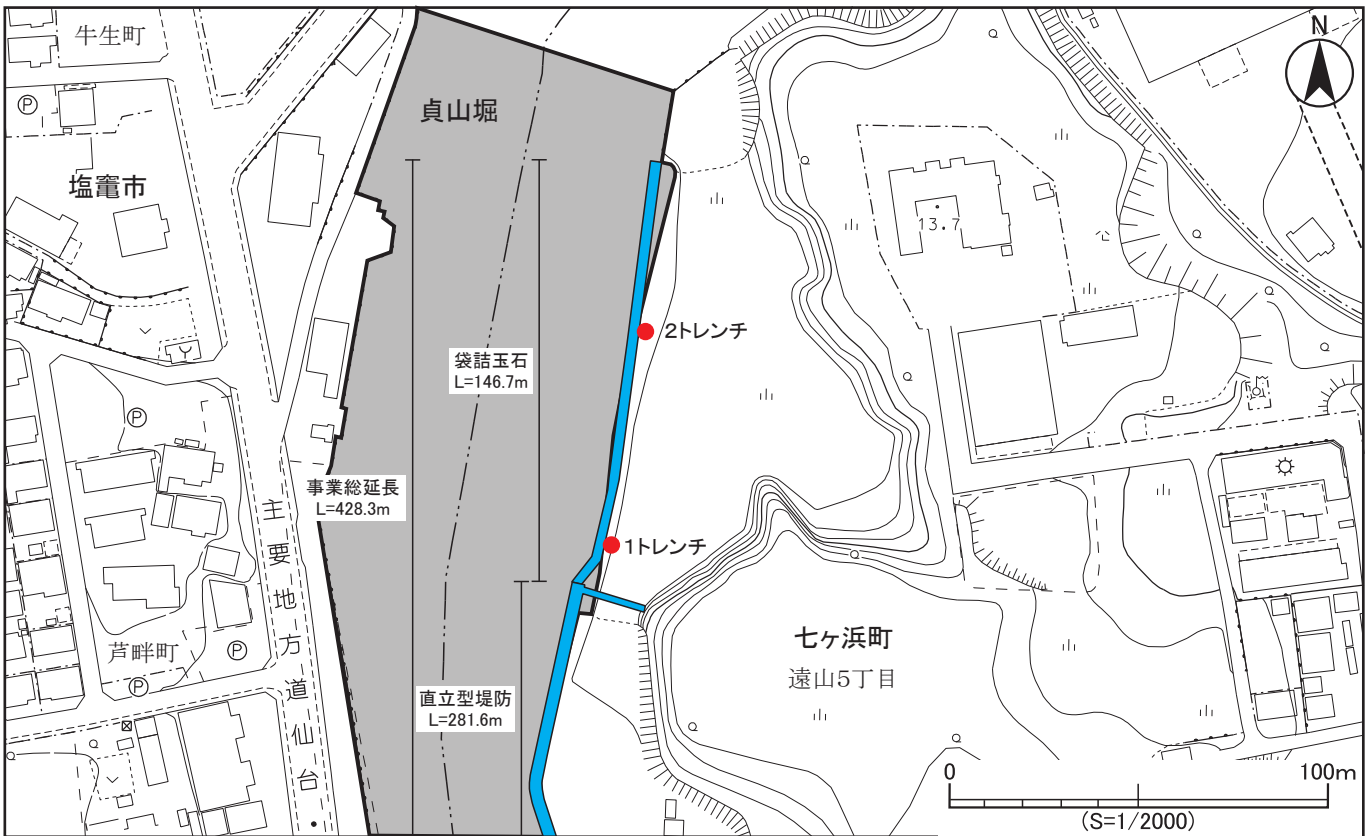
貞山堀（御舟入堀）

| 所在地 | | 時代 | |
|---------------------|-------------|-------|-------|
| 七ヶ浜町遠山五丁目ほか | | 近世・近代 | |
| 遺跡番号 | 過去の調査歴 | 種別 | 立地 |
| 18052 | 2013・15・16年 | 運河 | 浜堤・低地 |
| 検出遺構等 船溜まり跡、石積み護岸ほか | | | |
| 出土品 陶磁器、瓦、木製品、土製品ほか | | | |

※七ヶ浜町内における調査事例がないため、仙台市・多賀城市内での調査歴及び遺構・出土品を表記

周辺の遺跡

- 6：大木囲貝塚（縄文） 32：左道遺跡（縄文・奈良・平安）
- 39：大木城跡（中世）
- 43：鬼ノ神山（野山）貝塚（縄文・弥生）
- 46：野山遺跡（縄文・弥生）



第20図 トレンチ配置図

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | 特徴 |
|-----|----|-------|------------------|-----------------|
| 1 | 砂層 | 極粗粒砂 | 暗オリーブ褐色 2.5Y3/3 | 礫、カキ殻を含む |
| 2 | 砂層 | 粗粒砂 | 暗オリーブ灰色 2.5GY4/1 | 葦の地下茎・樹根・大型礫を含む |
| 3 | 土層 | 粘質シルト | 褐色 10YR4/6 | |

第11表 貞山堀 1トレンチ土層観察表

| 層番号 | 分類 | 土質 | 土色 | 特徴 |
|-----|----|----------|----------------|------------------------------------|
| 1 | 砂層 | 極粗粒砂～粗粒砂 | 灰黄褐色 10YR4/2 | 極粗粒砂と粗粒砂の互層（6層分）、根・貝殻を含む（面積割合3～5%） |
| 2 | 砂層 | 極粗粒砂 | オリーブ褐色 2.5Y4/4 | 直径5～6cm程の礫を含む |

第12表 貞山堀 2トレンチ土層観察表

(2) 調査要項

遺跡名 貞山堀^{ていざんぼり}（宮城県遺跡地名表登録番号 18052）
調査地 七ヶ浜町遠山5丁目地内
調査原因 護岸整備
調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）
調査期間 令和元（2019）年10月30日・31日
対象面積（事業面積） 2,140㎡ 調査面積 3.4㎡

(3) 調査の概要と成果

令和元年度に宮城県仙台土木事務所より七ヶ浜町遠山5丁目地内の貞山堀東岸において、鋼矢板及び袋詰玉石による護岸新設工事の計画が示された。これを受けて宮城県教育庁文化財課、宮城県仙台土木事務所、町教育委員会生涯学習課文化財係の三者で令和元年10月に計画地の現地確認を行った。その際、計画地北側の岸辺に水面から露出する石積み列を確認した（写真図版10-②～④）。このため、石積み列の性格把握と計画地内での貞山堀に関わる遺構・遺物の有無を確認する必要があると判断し、確認調査を実施した。調査地点は塩釜港側の貞山堀東岸で、現状は砂浜状の岸辺となっている。この場所にトレンチ2本（1・2トレンチ）を設定し（第20図）、人力で掘削を行った。掘削後に写真撮影、土層堆積状況の観察・記録を行った後に人力で埋め戻しを行った。

1 トレンチ

1 トレンチ（1.1m×1.2m）は岸辺南側、干潮時の汀線付近より陸側に設定した。石積み列とは約1.3m離れている。人力で約40cm掘削したが、トレンチ床面からの湧水や船の往来による波で水没するため、これ以上の掘削は困難であった。堆積層は2層確認した（写真図版11-①、第11表）。表土（1層）は暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）の極粗粒砂層、2層は暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）の粗粒砂層で、2層には葦の地下茎、樹根、大型礫を含んでいる。トレンチ底面は褐色（10YR4/6）の粘度の高いシルト（3層）であった。

2 トレンチ

2 トレンチ（1×2.5m）は岸辺の中央部に設定した。人力で約30cm掘削したが、1 トレンチ同様にトレンチ底面からの湧水や船の往来による波で水没するため、これ以上の掘削はできなかった。堆積層は2層確認した（写真図版11-⑥、第12表）。表土（1層）は極粗粒砂と粗粒砂の互層の灰黄褐色（10YR4/2）の砂層で、根や貝殻を含んでいる。2層はオリーブ褐色（2.5Y4/4）の極粗粒砂層で、直径5cm程度の礫を含んでいる。

石積み列

石積み列に使用されている石材は、縦20～25cm、横30～40cm、厚さ約20cmの粗く表面を加工した、間知石状の石材である（写真図版10-⑥）。石積みは岸辺全体で断続的に確認でき、その延長は約147mに及ぶ。積み方は石材の隅を立てて積む、谷積み（落とし積み）と呼ばれる方法である。今回検出した石積み列は基部付近で、石積み上部は失われている。石積み護岸または建物の基礎であったと考えられる。

(4) まとめ

今回の調査では、貞山堀に関する遺構・遺物は検出されなかった。石積み列については、石材の積み方や仙台市宮城野区蒲生地区での調査成果（仙台市教育委員会2010・2018）から構築時期は近現代である可能性が高い。今回の調査地点付近は掘削などを伴わない袋詰玉石による護岸であること、調査結果から貞山堀との関わりが低いと考えられるため、当初の計画通りに実施して問題がないと判断した。

第5節 長須賀遺跡（第21～26図、写真図版12・13）

（1）遺跡の概要

長須賀遺跡は七ヶ浜町花淵浜字長須賀地内に所在する古墳時代後期～平安時代の貝塚・製塩遺跡である（第22図）。町内には表浜貝塚や水浜遺跡など、主に陸奥国府多賀城へ塩を供給したと考えられる製塩遺跡が点在しており（第21図）、本遺跡もこのような遺跡の一つである。遺跡は菖蒲田海水浴場の北東側に広がる浜堤上に立地し、現海岸線からは約150mの距離にある。昭和44～46（1969～71）年に東北学院大学工学部技術史研究会による発掘調査が行われており（※註2）、古代の製塩炉と製塩土器集中遺構を検出している。出土遺物は土師器、須恵器、厚手の製塩土器片などが出土している（第23図）。昭和45年の調査では、2か所で硬く締まった灰層の広がりを検出しており、製塩遺構であると考えられる（第25・26図）。昭和63（1988）年には町道整備及び個人住宅建築に伴う確認調査が行われている。また、平成24・25年度には県道改良事業や高台移転地の雨水排水路整備、造成発生土仮置き場整備に伴う確認調査が行われ、炉跡14基、土坑16基、焼土面1か所、貝層・遺物包含層2か所、多数のピットが検出された（第23図）。遺物は古墳時代後期の土師器、奈良・平安時代の土師器・須恵器、製塩土器、骨角製品、鉄製品、動物遺存体（貝類）などが出土している。製塩土器は在地の厚手の製塩土器に交じって、三河湾沿岸地域で主に出土する棒状脚を持つ製塩土器片が出土している（第14図2）。

※註2：前報告（七ヶ浜町教育委員会2016）では、東北学院大学工学部技術史研究会による昭和44・45年の2か年にわたる調査を1次調査として報告した。報告後、昭和45年の発掘調査概報（ファイル綴じ）と昭和46年の埋蔵文化財関係手続書類一式（ファイル綴じ）を発見した。調査概報に掲載されている図面と写真などを精査したところ、昭和44・45年の調査地点の間は約90m離れており、それぞれ異なる地点の調査であることが判明した（第23図）。また、昭和46年の調査地点は昭和44年の調査地点付近であり、土師器や須恵器、骨角製品、土錘などが出土したことが判明した。このことから、昭和44年調査を1次調査、昭和45年調査を2次調査、昭和46年調査を3次調査とすべきであるが、調査次数の修正により今回報告分の調査次数に影響を及ぼし、混乱をきたすと判断したため修正は行わなかった。

（2）調査要項

遺跡名 長須賀遺跡（宮城県遺跡地名表登録番号 20006）
調査地 七ヶ浜町花淵浜字長須賀地内
調査原因 長須賀地区多目的広場整備
調査担当 田村正樹（七ヶ浜町教育委員会）
調査期間 令和元（2019）年11月26日
対象面積（事業面積） 約66,950㎡ 調査面積 10.6㎡

（3）調査の概要と成果

令和元年度に町建設課より花淵浜長須賀地区に多目的広場を整備する計画が示され、事業範囲が遺跡範囲のほぼ全域に及ぶことが判明した。宮城県教育庁文化財課、町建設課、町教育委員会生涯学習課文化財係の三者で協議を行った結果、整備される諸施設の大部分が造成盛土内で収まり、遺構が残存する下層まで工事が及ばないこと、計画地北東側は平成24・25年度に確認調査を行っており、遺構の分布状況などがすでに把握されていることから、これまで調査が行われていない計画地南西側で遺構・遺物の有無を確認するために確認調査を実施することとなった。計画地西端の深い掘削を伴う擁壁設置場所付近にトレンチ2本（26・27トレンチ）を設定し（第24図）、重機を使用して掘削を行った。